

# まかないよにんまえ

◆七面体工房ログ・ホライズン短編集◆



七面体 工房

7 Sided Work Shop

「Web配信版」

# まかないよにんまえ

七面体工房ログ・ホライズン短編集

もくじ

序	……	2
濡羽の甘美な休日(さわめ)	……	4
シングアソング!(津軽あまに)	……	14
エルフの廃王子(橙乃ままれ)	……	26
晩秋のとある居酒屋にて(山本ヤマネ)	……	36
あとがき	……	48

## 序

しよっぱなから金管楽器のファンファーレが鳴り響いた。

日常生活ではなかなか耳にしない、華やかな音色に合わせて舞台の左右から踊り子たちが列をなして登場してくる。セーラー服。とはいっても原義のそれであるところの水兵服の上着に半ズボンをもとつた少年〈大地人〉が左右で合計二十人。軽快な現代曲にあわせて、半腰で左右に揺れるラインダンスは一糸乱れぬ統率を見せていた。

カッ！ という破裂音さえ感じる強烈さで、その舞台中央にまばゆいばかりのスポットライトあてられる。〈魔法の明かり〉である。

幾条もの光線が交差する舞台の中心にさつそうと現れたのは、洒脱な雰囲気を持つひとりの青年だった。枯れた濃紺の服は甚で〈円卓服〉と呼ばれるアキバ〈冒険者〉の正装であるのだが、その青年は鳥の羽で作ったと思しきボリューム豊かな純白の襟かけをあわせている。その雰囲気は、軍服にも似た制服をどこまでも享樂的に見せていた。

微笑みを浮かべながら右へ三步ステップ。何かを求めるように右手を大きく広げ、今度は舞台の反対側を指し左側に小走りに十歩ほど。そこで会場を抱きしめるかのように左手を一振り。

そう。

そこはまさに会場だった。大規模な宴席に対応できるこの大広間には熱っぽい眼差しを向ける多くの人々が詰めかけていたのだ。

まばゆい光にあふれるステージの上とは違い、その大広間はかろうじて同席者の顔が判別できるほどの闇に沈んでいるが、リネンのテーブルクロスに覆われた円形のテーブルが二、三十は並んでいる。どのテーブルにも五人ほどの客が付いていると考えれば、観客の人数は百人を超えるだろう。その他壁際には鎧兜の警護の騎士が、そしてテーブルの間を邪魔にならぬように縫う配膳係の女性がいることと合わせれば、これがどんなに大きな広間なのか想像がつくだろう。

まごうことなきディナーショーである。

「れでいーすえんどじえんとるみえん！」

今宵はお集まりありがとうございます！」

にこやかな表情のギルドマスター、〈第八商店街〉の若旦那ことカラシンが口上を述べる。

その背後では猫耳をつけた少年バックダンサーが腕をL字にまげたまま左右に振るといふ、陽気……というよりは脳天気なダンスを無駄に洗練された動きで一糸乱れず行い、会場の雰囲気を温めている。

「本日の演目は〈まかないよにんまえ〉。いずれ劣らぬアキバの名演者が奏でるは四つの物語。笑いあり、涙あり、勇壮部分はすくなめですが、しんみり部分は無きにしもあらず。

第一のはなしは西の姫君のはなし。皆様御存知のあの人の赤裸々な私生活がどーんと大公開。もちろんフィクションですが、フィクションということにはしておかないと戦争になってしまからそうしているだけでして真相は皆さんのご想像におまかせしましょう。

第二は陽気な東の歌姫のはなし。歌姫のはなしなのに大きな顔で出てくる悪魔の連中はあれですが、あれで本当に気のいい楽団ですので、そこは何卒ご容赦を。

第三のはなしは北の王子の物語。語るまでもない伝説のオーラルバックですが、あの方については細かい言及を避けましょう。怒らせるると狙撃されちゃいますからね。

そして最後は〈大地人〉の皆さんには馴染みのない異界の居酒屋のはなし。どこのどんな世界でも、年頃の乙女の交わす話題は常にひとつということですよ。

どれも肩肘を張ってご覧いただくようなものではございません

ん。〈まかないめし〉などというものは、そもそも身内が愉しめばそれで十分なものでございますが、これでなかなかバカにも出来るものではないのです。エスプリの利いた小さなお話です。気持ちを楽しんでご覧いただければこれ幸い！ お帰りの際にはぜひ会場限定グッズをお買い上げくださいませ！」

提供はくすべての品物をあなたのお手元へ。ダイハチ、ダイハチ、あなたの街の頼れる味方。開いてよかった〈第八商店街〉。なんだかとても商業主義の香りがする軽妙な音楽とともに部隊の緞帳が開き、光の魔術で投射される背景には八つの金貨のロゴマーク。どこまでも抜け目が無い若手ギルドマスターである。

頭をひとつ下げたカラシンはその場で軽やかにターンを決めると右手を大きく広げて右に、そしてもちろん左側の客席にも視線をやってアピールをすると舞台袖に消えていった。

すでに客席の照明はほの暗くなっており、静かに抑えたようなハープの音色が流れるなかで、最初の演者が表れた。

黒目黒髪の吟遊詩人は、手元の水入れから一口飲むと、張りのある声で演目の名称を高々と謳い上げる。

一夜の舞台の幕が上がる。月はまだ窓の階にかかったばかりなのだった。

## 濡羽の甘美な休日

さわめ

アキバより遙か西、西ヤマトで活動する〈冒険者〉たちが掘りどころとするプレイヤータウン〈ミニナミ〉。この街は〈P I a n t h w y a d e n〉というギルドの元に統一され、ヤマト最大の勢力としての威を放っている。

だがその頂点にあるギルドマスター、西の納言こと濡羽は何ひとつその内に持ち合わせない空虚な人形であった。人の欲望を映す鏡として嘘を纏い、甘い夢の対価に全てを奪って捨てる巨大な虚、それが彼女の生き方。己を含めたあらゆるものに無価値の烙印を押し続けることで、自分の世界を守る以外の術が無かった日々。

それを壊したのはたった一つの魔法の言葉。

自分が無価値で無いことを証明するよすがはただ一言、ただひとりの魔法使い（シロエ）の言葉だけ。

「ぼくは貴女の『対等の存在』（てき）として在り続けることにします」というメッセージ。

ただ濡羽ひとりに向けられた言葉。それだけが、冷たい無関心と虚飾で作られた彼女の牢獄にあって、仄かなあたたかさで濡羽を守っている。

このお話はそんな哀れな姫に与えられた、うたかたのユメ。

季節は冬の終わり、闇は深く夜明けは少々遠い夜のひと時。〈冒険者〉の体にとつて単なる寒さは問題にならないが、コククリートの床を思い起こさせる冷え冷えとした空気は、濡羽の数え切れない「嫌いなもの」のひとつだった。

彼女に与えられた〈金鳳花の宮〉は広大で、その佇まいは壮麗でありながら華美に過ぎるところが無く、内にあつては贅を凝らした上品な調度品が整然と並び置かれている。しかしそれはただそこに在るだけ、どれ一つとしてあるべき道具としての務めを果たさない、ヒトの手を経てヒトの生活を彩ることのない無価値な置物となり果てている。

偽りだけで作り上げられた姫を囲う無機質で絢爛豪華な牢

獄、その中心で濡羽はすでに日常となった忌まわしい亡霊を振り払いながらの夜を過ごす。満足に眠れたことなど一度たりともなく、疲れ果てて眠れたらと願っても〈冒険者〉の強靱な肉体はそれを許してはくれない。半ば麻痺した時間感覚と泥のよう鈍った意識で夜明けを待つのだ。

しかしその日はいつも通りではなかった。濡羽は、ふいに指先に鋭い痛みを感じて意識を覚醒させた。視線を巡らせ、自分を起こした犯人を目にするとそこにいたのは紅瞳の白鼠、〈ヘクリューラット〉。小さな侵入者は濡羽が己の存在を認識したこ

納品書

拝啓

日ごろから弊社の商品調達サービスをご利用いただき誠にありがとうございます。

今回は、裁縫ギルドが新たに開発した「抱き枕にも使えてメンテナンスフリー」と称した試作大型枕のモニターという名目で、〈記録の地平線〉のシロ工が、週間使用し続けた枕をご用意させていただきました。お客様の要望に沿った仕上がりであると確信しております。

品物 … 〈記録の地平線〉のGM、シロ工使用済みの枕 ×

1点

代金 … 200000Gの入金を確認済みです。

品質については問題ないかと思われませんが、万が一不備が見つかった際は一周間以内にKRシークレットデリバリーまでご連絡ください。しかるべき対応を取らせていただきます。

敬具

とを確認すると、小走りに距離を取る。そして眩い白光を放つ

て——人のカタチとなった。やせ細った体に雑に長髪を纏めたエルフの男は〈十席会議〉の末席にその名を連ねる変幻道

他のKRだ。〈十席会議〉のほとんどを欠席している濡羽からすれば、顔を合わせることも滅多にない男だが、その脇に抱えられた大き目の箱を見て濡羽はおおよその事態を把握した。

「こんな夜更けの不躰な訪問で申し訳ない、姫サン。とはいえモノがモノだけに大つぴらに渡せるものでもないし、こういう形を取らせてもらうことにしたよ」

深夜に淑女の部屋に忍び込んだというのに悪びれる様子もないKRに対し、濡羽の態度もまた取り繕われた返事となって現れる。

「わざわざこのような夜更けにご足労いただけるとは思いませんでした。貴方が来たということは、私のお願いの品は無事確保できた——ということの間違いないのですね？」

濡羽の問いかけに無言で頷きを返し、KRは抱えていた箱を放り投げて人の悪い笑顔を浮かべる。渡された箱の外見は地球世界における世界最大規模のマーケットサービスで買物をしたときの梱包そのもので、どこでこんな物を揃えてくるのかと呆れてしまうようなものだ。

「代金の方は20万Gの入金を確認済み、モノは裁縫ギルドの手製品を試作品モニターとの触れ込みで偽装してあるから品質は確かだと思うよ。詳しくは納品書を読んで、クーリングオフ

は一週間以内でことでヨロシク。——それでは良い夜を」

言いたいことを一方的に並べるとKRは窓から外へと消えていき、同時に濡羽の意識からも消え去った。最早そんなことは些事ですらない。今ここで重要なのはたった一つ、届けられた箱の中身だ。クリスマスプレゼントを開梱する子どものような勢いで箱を引き裂き、中身を確認する。納品書と題された紙片と、大きな枕がそこに収められている。

濡羽は深くゆつくりと呼吸し、できる限り心を鎮めてから紙片をゆつくりと黙読する。

最後まで読み切ると、濡羽は深く息を吐きだして『納品書』を狐火にかざし、その存在を隠滅した。そして残った枕を愛おし気に強く、強く抱きしめる。

「うふふふ……シロさま、シロさまのまくら——」

枕に顔をうずめたまま、誰にも聞かせたことのない緩んだ声でその名を呼ぶ。いとしいひと、濡羽をわたしにしてくれるただ一人の魔法使い。立場と距離が、出会うことも、触れることも、想いを伝えることも許してくれない、まるで天上に輝く星のように遠いひと。

だからせめてその痕跡をかすかに感じるだけでも、そんな風に願ってしまった。

濡羽の中の「濡羽」は冷ややかにそんな「わたし」をあざ笑う。まるでティーン少女が夢見る安っぽい恋愛小説のヒロイ

ンのよう。なんて低俗で陳腐で退屈な、いまさら衝動に振り回されるだけの初心な娘にでもなったつもり？と。

そしてその自問に対する回答といえば、半分は泣き言のようなものだ。シロエの『対等』であるために人形を止めること、それはインテイクスの軛を破ることを意味していたが、その結果として濡羽自身が果たすべき役割が急激に増えたのだ。

シロエに包まれているユメでも見ないとやっていられない。

枕を抱きしめたままそう思ったところで、濡羽の意識は深い深い眠りの淵へと沈んでいった。



その夜の濡羽は、全身に不機嫌を纏ったままベットの上で漫然と夢と現実の境を彷徨っていた。軽くて暖かな毛布は春先のまだひんやりとした夜の冷気を遮るのに十分な役割を果たしていたし、確かな技術で作り上げられたベッドの弾力と、清潔感あるシーツの寝心地には不満は無かった。しかし、あと少しもすれば東の空が色を変えはじめるであろう、そんな時間にもなつてこのクイーンサイズベッドで一緒に眠るべきシロエが自分分をひとりのまま放っておいていることは、どう考えても看過できることではなかった。

手を伸ばせば届く距離にあるはずの温かさが感じられないこ

との不安感がベッドを妙に広く冷たい印象にさせるし、そんな夜がそうそう珍しくもないという点も腹立たしい。シロエが誠実で几帳面かつ不器用な性格であることはもちろん理解しているし、彼にしかできない仕事というものがあることも分かっている。でも、そうやって理屈でわかっているからと言って一人で眠る寂しさは紛れないし、納得できることでもない。二人で暮らそうと言ってくれたときはあれほど嬉しかったのに、これでは有名無実なのでは？という疑念も湧いてしまう。

そんな思いを何度反芻したか忘れたころ、ようやくシロエが寝室へと帰ってきた気配が濡羽の意識を浮かび上がらせた。きっと疲れ果てた顔に申し訳なさを貼り付けてフラフラしている、なんて様子が容易に想像できるけれど、そんなことで濡羽が今夜味わった寂しさを知らないままで済ませる気にはなれない。これ見よがしに薄目でシロエを一瞥したあと、寝返りを打ってシロエが眠るはずの領域に背中を向ける。

「あのう、濡羽さん……、起こしてしまいました？」

狼狽と罪悪感が絶妙に混じりあった声でおそるおそるシロエが確認してくる。

「いいえ、濡羽はずーっと眠っております。広いベッドにひとりぼっちの寂しい夜を幾度も過ごしておりますから、シロさまがこんな夜明け前のような時間までわたしを放っておかれても平気です。どうぞ、そちらの空いたところでお休みなったらいかがですか？」

濡羽は素っ気なく、あからさまに「ほったらかしにされてわたし不機嫌です」というシグナルを山盛りにした言葉を返す。が、この二人にとつてはある種の、不本意ながらもパターン化したやりとりでもあった。シロエとの関係において、こうなった自分とはかくなだめすかして満足させてもらわないとずっと意固地になつてしまうことについて、濡羽には自覚があった。寂しがりで、気まぐれなくせに変なところで意地っ張り、あまりにこじれてしまつて、好きなひとの前ですら真っ直ぐな好意を受け止められない臆病な自分。

「わかりました。これから僕も休ませてもらいますね」

内心はともかく、平静を装ったシロエの返事が聞こえる。背後の気配から、ベッドにシロエが入ってきたことも分かる。濡羽の脳内で、今すぐに向き直つてその体温を感じたいという衝動と、頭のなかに重たく残つた不満とがぐるぐると入り混じる。

次にどんな言葉を続けようか、濡羽がそんな風に、ほんのわずかにためらっている間にゆっくりと背後からシロエの腕がまわされ、抱きしめられてしまう。その腕はあくまでゆるく優しく、いつでも振り払えるようなやわらかな抱擁だ。この一晩求めつづけていたシロエの体温がようやく感じられる距離に——そう考える一方で、されるがままになつてしまった自分が少し腹立たしい。それが次の言葉を紡ぐきっかけになった。もちろんシロエに甘えた格好での追及だ。

「シロさまはわたしよりもお仕事の方が大切ではないですか。そんなに書類がお好きならわたしなんて放っておいて、紙の束を恋人にされたらいいんです。というかわたし——」

しかし、その言葉が最後まで続けられることはなかった。それは途中で急にシロエに強く抱き寄せられてしまったからであり、さらにはシロエが耳元でゆっくりと囁く甘い言葉に抗うことに必死になってしまったからだ。

「イヤです。レイドボスに向けてゾンビアタックしてくる〈冒険者〉みたいな書類仕事を片付けて、やっとの思いで濡羽さんのところまでたどり着いたのに——濡羽さんはぼくのこと、みてくれないんですか?」

ずるい、このひとはなんてずるいんだろう——濡羽の中で渦巻いて言葉になろうとしていたものが全て真っ白になってしまふ。それでも不思議と濡羽の口は言葉を紡いで、想いを形にしていく。

「シロさまはずるいんです。こんな時間までわたしを不安にさせて、それなのにことば一つで誤魔化そうなんて。いくらシロさまのお願いだからって、わたしだけ簡単に振り向くなんて、そんなの不公平です」

そう、ちよつと拗ねているから甘い言葉を掛ければコロリと機嫌がよくなるなんて、そんな風に軽く思われるのは、シロエに限ってそんな風に考えたりしないと分かっている、やはり嫌なのだ。わたしを見て、求めて、時にはちよつと心配して、

わたしの事が心の中の大きな部分を占めて欲しい。濡羽がシロエをそう思うように、シロエにも濡羽を想って欲しいと願うのは当然のことだ。

「じゃあ濡羽さんはそのままでもいいので……ちよつとだけ、充電させてください」

後ろからそんな言葉が聞こえたところで、ぎゅつとシロエが体を密着させてきたのを感じる。さらに後頭部からうなじにかけて聞こえる温かい息遣いが、髪に顔を埋めていることを否応なしに訴えてくる。

「濡羽さんって、どうしてこんなにあったかくて、やわらかくて、いい匂いがあるんでしょうね——すごく、安心します」

背中越しに伝わるシロエの体温と、急に熱を帯びて言うことを聞かない自分の体。心臓の鼓動が跳ね拳がって呼吸が浅くなり、言葉もどこへ行ってしまったのか形をつくることができな

い。

「あ、あのつ、シロさ——ひゃうっ!?!」

一瞬シロエの体が離れたと感ずる間もなく、うなじのあたり

に強くキスをされて不意の声を上げてしまう。

「すみません、キスしたらちよつと痕ついちゃったかもしれないです。髪に隠れるから平気かなって——。あと、濡羽さんちよつとこの前と違う香り……?です。前はバナラみたいな甘い香りだったのが、今日は花……名前までわからないですけど、花の香りで素敵です」

そういえば、冬がもう終わるからと、やってくる春をイメージできるように香水を変えたのだけ——。そのことにシロエが気づいてくれたのは素直に嬉しい。そろそろ意地を張るのを止めてシロエに向き直っても良いかもしれないと思い始めたところで、シロエの手の動きが変わった。後ろから抱きしめる格好はそのままだに、腹部から身体の側面にむかつてゆっくりと体のラインをなぞってきている。

「シロさま——、こんな時間ですよ？」

その手の温かさにうっとりとして浸りながら、確認するように言葉をかける。本当は、シロエが抱えている抑えがたい熱は後ろからはつきりと伝わっているけれど——。触れ合えない心は、言葉にして互いに伝えたい、受け取りたいと思うものなのだ。それはきつと濡羽の特別なわがままではなく、ごくありふれたふたりの他人が触れ合うときに願うもの。

シロエの手が蠱惑的な曲面をえがく胸の下に回され、ネグリジェをゆるく絞っていたりボンがしゅるり、とほだけたのが分かった。再び、シロエが濡羽の体を抱きしめる。今度は最初よりも強く、体をすり寄せてきているのがわかる。そして耳元に感じられる——吐息。

「濡羽さんが嫌なら、濡羽さんが嫌がること、僕は絶対にしませんよ」

低く、甘く、隠しきれない熱を帯びた声で愛しい人が囁く。

「そんな言い方はずるいです、シロさま。わたしはシロさまの

ものですよ——でも、本当に『わたし』を求めてくださるのか、いつも不安なのですよ？ 言葉にのせてわたしを満たしてください。何度も、何度でも、わたしを欲しいんだって、教えてください。」

そう。他人に心を開くことはとてもこわい。逢瀬の度にいくら触れ合っても、ほんとうはわからない。ほんとうは何処にもない。自ら作り上げた虚像が、自らへ向けられるものすべてを偽物に変えてしまう呪い。

自分の心も本当かわからなくなるほどの嘘の中を歩いてきた濡羽が、傷つかないようにと無数の虚飾をまとった人形に隠したガラスの小箱（はだかのこころ）を開けるために用意された魔法の言葉。

たった一人の魔法使いにだけ使うことが許された宣誓。

「そうでしたね——濡羽さん、ぼくは、貴女の全部が欲しいんです。心も、身体も、全て」

その言葉がゆっくりと染みわたり、自分の一番外側と一番奥底にあるほつれて固まったものがほどけるを感じる。愛しい人に少しでも触れたいという声に忠実に従う濡羽。シロエの腕の中で器用にくるりと寝返りをうって、その顔を正面に見据える。仕事机に向かっている時に見せる、洗面にちよつとの困惑と思慮深さをブレンドさせた顔とは違う。熱を帯びた、濡羽だけが知っている愛しい人の隠された顔。なんだかそれがとても可愛らしくて、そのまま少しだけ顔を見上げて軽く唇を触れ合

わせる。

「はい、シロさまのためだけの濡羽です。存分に今夜のわたしを——愛してください」

そう言つて微笑むと、もう一度、より深く長く唇を重ねる。

シロエに抱きつき、愛おし気にその背中の感触を確かめ、首や胸元に頬ずりを繰り返す。自分を包み込む両腕は次第に熱をもって身体をなぞり、二人の足が絡み合う——。

何よりも求めつづけた人と体を重ねる昂ぶりと幸せが濡羽の中を駆け巡り、ただシロエを求めること以外の何もかもがわからなくなっていく。

その行為がエスカレートしていかうとした刹那、自分を遠くから呼ぶ不快で聞きなれた声が、全てを白い光の彼方に押し流してしまつた——。



芒洋とした意識が、濡羽の今を再確認させる。そこは見慣れた〈金鳳花の宮〉の一室で、シロエの使用済みまくらに思いきり抱きつき、ホールドした状態の自分。つまりユメは不本意な中断を迎えて現実に戻されたということだ。

全身に重く失望がのしかかり、何ひとつ本物ではない人形遊びの箱に押し込まれた人形のような気分というのが濡羽の率直な感想だつた。

「——濡羽様、濡羽様、お加減が優れないのですか？」

ドアの向こうから聞こえてくるのは、名前は忘れたが側付きになつているメイドの誰かだろう。気分は最悪を通り越していたが、どんな時であっても己を完全に取り繕うように作り上げられた「濡羽」はそつなく受け答えをこなすことができる。

「ええ、今日は少し気分が優れませんので——休ませていただきます。食欲がないから夕食だけ部屋に運ぶように」

もう少しだけユメに浸る時間を確保するために、メイドに指示を出す。濡羽が引きこもりがちなのは現在の〈ミナミ〉の運営状況でもさして変化したものでもなし、せめて一日くらいただ枕を堪能するだけの日があつても良いだろうと思わずにはいられない。

「午後にはロレイルドーンさまがいらつしやる予定でしたがいかがなさいますか？」

しかし、次のスケジュール確認はかなり不快な話題だつた。直前まで見ていたユメと比べたら、聞いただけでうんざりさせられる名前。一顧だに値しない退屈な男、濡羽という鏡に自己の陶酔を映したような男、シロエとのユメの後に聞かされるには最悪の名前の一つだ。

「体調がすぐれないので今日の予定は中止と伝えなさい」

冷たく一言、簡潔に伝えると濡羽は再び自分の寢床に戻る。

例えそれが思い込みだつたとしても、一瞬のユメに過ぎなかつたとしても、抱きしめて、キスをしてもらつて、君が欲しい

いと言ってもらえるなら――。

これ以上ないほどきつく枕を抱きしめた濡羽の意識は、甘ったるい願いと共に再び深い眠りの底へと沈んでいった。



よろい戸を通して差し込む朝日が、ゆったりと濡羽を覚醒させる。

新しく購入したゾーンを居住用に仕立て上げるのは人の手作業によるものだ。現実で工作に通じていたわけでもない〈冒険者〉の仕事は、細かいことを言えば粗がある。ゲーム上のオブジェクトだったものに手作業で作った窓を取り付けていく結果としては無理もないところで、結果として夜明けと共に光が差し込んで朝を知らせる格好になっている。

毎朝きちんと起きるよりは好きなように眠ることを好む濡羽だが、この「朝の知らせ」は思いのほかお気に入りでもあった。ただの「購入したゾーン」がふたりで生活していくために作り替えられていく様は心が躍ったし、何よりもこの朝日はシロエと過ごす新しい一日の到来を教えてくれる。そう思えば、つくりが拙い窓枠もふたりの毎日を彩っているように感じられるのだ。

今朝もシロエはすでにベッドの上には居ない。濡羽よりも少しだけ早く起きて、朝食の準備をしているのが常だ。シロエが

いつも通りであることにほんの少しの安堵と、羞恥が入り混じった感情を覚える。一糸まとわぬまま、皺だらけになったシーツの上に毛布ひとつという姿は、ふたりで暮らすようになっても気恥ずかしい。

毛布を被ったまま、ほんの少しだけ昨夜のことを思い出す。シロエの息遣い、甘い囁き、時に情熱的に、あるいは繊細に自分をなぞりあげる手のひら。触れ合うだけの口づけ、深く長いキス。いとおしげに髪を梳く指、大きな手のひらと絡み合う指先。触れ合ったところから余すところなく伝わる体温と、自分だけが受け止められる彼の昂ぶり。全てを見られてしまったという恥ずかしさと、何の心配もなくその腕に身をゆだねて眠れという安心感。ほんの少しどころか一部始終を思い出してしまい、耽溺しないように自制していると、幸せを受け止めきれない自分の顔がどうなっているかもわからない。そんな記憶の断片が甘い疼きと、全身を包む温かさを濡羽に与えてくれる。

もう少しだけこの温もりに浸っていようか、そんな風に濡羽の意識が夢と現実を揺蕩いはじめたところで、もう一人の部屋の主がやってきて濡羽をこちら側に引き戻す。

「濡羽、起きてる？ そろそろ朝ごはん作っちゃおうかと思うんだけど。昨日から漬けておいたフレンチトーストと、あとお茶を何か。ハーブティーと紅茶のどっちがいいかな？」

いつもなら希望を伝えて朝食のために起きるところだが、思考が半ば蕩けたままの濡羽の唇は愛しい人に向けて甘えた言葉

を紡ぎます。

「シロさまがいいです、朝はおはようのキスをくれないと起きません」

そういいながら毛布を被つてしまふ濡羽に、シロエがほんの少しだけ笑みを見せてくれる。

「今朝もお姫様はわがままでね。濡羽は——しかたないなあ」

《新妻のエプロン》を畳んでシャツ姿になったシロエがベッドに上つたのが軋みから伝わる。ゆっくりと息のかかる距離まで近づいて——。

「おはよう、濡羽。今日もいい天気だよ」

濡羽の頬にゆっくりとシロエの唇が触れる。洗濯され陽の光で十分に干された清潔なシャツにかすかに漂うシロエの匂い。胸の高鳴りに任せて濡羽はシロエをかき抱き、巻き込むようにしてベッドの上に寝転がらせる。《冒険者》は実のところ男女の能力差がないから、その気になれば濡羽がシロエを振り回すことだってできるのだ。

「濡羽、欲しいのはおはようのキスじゃなか——」

「シロさま、シロさま——、しろさまっ」

思わぬ急襲に狼狽するシロエをよそに寝転がしたシロエに抱きついて濡羽は思い切り胸板に頬ずりを続ける。もちろん相変わらずの糸まとわぬ姿で、である。

「こうやって堪能するたびに思うのですけれど、シロさまって、ほっそりしてますけどきゅっと抱きしめて腕に収められ

るぐらいで丁度いいですよね」

濡羽は身体をすりつけながら、じりじりとシロエの胸板から首元、そして直接頬を合わせるころまで位置を変えていく。

「眠り姫から王子様へのお・か・え・しですよ？」

悪戯っぽく笑つてシロエにお返しの手を濡羽の頬に、額に、まぶたに、鼻先に、あごに、そして唇にそっと触れ合わせるようにキスを繰り返す。そして最後に長い口づけを交わして屈託のない笑みを見せる。

「シロさま、いかがでした？」

「……けっこうなお点前でした」

されるがままになつていたことが大分恥ずかしかったのか、シロエの顔は朱が差したようにみえる。いざ事となれば、鋼すら容易く断ち切る刃のような青年が、同時に自分の前ではこんな柔く繊細な反応を示すことがなんだかおかしくて、濡羽は自然と頬が緩んでしまふ。

「シロさまって、夜の帳の内で一度火がつけば狼の狩りよりもずっと執拗かつ激しくわたしを求めてくださいますけど、太陽が高い間は何ひとつ求めてくださらないですから、わたしはちょっと不満なのですよ？」

そしてちよつとした意地悪もしてみたくなくなつてしまふ。

「さすがにそれは、TPOとかムードとかTPOとかが……」

陽光に浮かぶ濡羽の真っ白な肌に目線を沿わせたり外したりしながら返事をするシロエの言葉は、なんとか問答から逃れよ

うとしつつも失敗している。

「でしたら、今日一日こんな風にベッドの上でわたしと過ごすのはお嫌ですか？」

しどろもどろな返答でもう退路が無いことを確認して、濡羽は一気に追い込みにかかる。恋は速攻瞬殺。相手が戸惑いを見せたら一気に踏み込んで流れをつかんでしまふべきなのだ。

「——嫌じゃ、無いよ。それはもう。そんな日があればって、思うことも——たまに」

「じゃあ、今日はそんな日にしましょう？ シロさまのお仕事もお休みで、ここでわたしとふたり、好きなように求めて、触れ合って、ふたりの全てがとけあってしまうような休日を通しましょう？」

濡羽はゆつくりとキスをしながら器用にシロエのシャツのボタンをはずして肌に直に触れる。無粋な布越しではない、愛しい人の鼓動と体温が直に伝わる。陽だまりの温かさとは違う、もっと甘やかで触れたものを蕩かす温もり。

「わたしたち二人の家（わたしたちしか入れないゾーン）ですもの、お好きなだけ召しあがってください」

濡羽は最後の「押しとばかりに、シロエの耳元でゆつくりと囁き、その耳を甘噛みする。

「そのかわり、わたしにシロさまの全部をください。心も、身体も、今も、これからも——」

あなたがわたしの全てを求めるように、わたしもあなたの全

てが欲しい。

言葉にならないことばを込めて、その身をシロエに委ねる。

最初はためらいがちだったシロエも、濡羽の積極的なタッチやキスで次第に熱を帯びてきているのが分かる。シロエの手が繊細に触れるなら、濡羽は力を込めて抱きしめる。デリケートなところに手が及び、荒々しく求められれば、全てを愛おしく差し出す。

息遣い、汗、肌、体温、鼓動、互いの全てを求めて、何もかもが一つに溶け合うほどに触れ合う。ひとりのために作られたたったふたりだけのユメ。

たとえそれがうたかたのユメだったとしても、こんなどこにもでもあるような幸せが私の本心に欲しいものなんだ——。

自分そのものも押し流してしまうような幸福感の洪水の中で、芒洋とした「わたし」の聲が聞こえて、わたしはさらにユメへと溺れていった。ああ、『あと』秒でも長くあのヒトの腕の中に居させて』なんて陳腐でありふれた願いに自分が耽溺できることにちよつとした安心感を覚え、濡羽はその日まくらを決して放さずに心地よい夢に浸り続けた。

## シングアソング!

津軽あまに

アキバミュージックフェス、運営委員会。

チラシに書かれた地図の指し示す建物を前に、わたしは大きく深呼吸をした。

がんばれ五十鈴（わたし）。ここは勇気の出どころなんだから!

――〈アキバミュージックフェス〉。

それは、アキバで音楽を愛するミュージシャンたちが、ジャンル、腕、人数を問わず、演奏を行うイベントだ。

地球の世界だったら、ありえないセッティングだと思う。

プロ級の腕前のロックシンガーやアイドル歌手と、路上で弾き語りをしているようなわたしみたいな駆け出しが同じ舞台、同じだけの持ち時間で歌うことができるのだから。

初回開催はルディとの買い物帰りだったせいでちよつとしか見られなかったけれど、演奏する方も聴く方も、素朴で、好きなことやって楽しい感じがいっぱいあふれていて、なんだかこう、とにかくキラキラしていた。

ああ、音楽っていいよね、楽しいよねって、心からそう思えるような場が、そこにはあったのだ。

そして、フェスがまた開かれる予定だというチラシを見て、

わたしは思ったのである。音楽好きの端くれとして、こんなチャンスに逃すわけにはいかない、と。

そんなわけで、わたしはなげなしの勇気を出してそのイベントにエントリーすべく、こうして実行委員会の門を叩くことにしたのである。

「た、たのもー!」

いや違う。何を言っているのだわたし! 緊張し過ぎだし! っていうかそれ道場破りとかそういう感じだよね? でも言い訳をさせてもらうなら（誰にだろう!）、わたしがそんな素っ頓狂なことを言い出しちゃったにも一応理由はある。

エントリー窓口があるとチラシに書かれていた実行委員会の事務所。そこには、まるで空手か剣道の道場みたいに、木製のごつつい板に達筆な太い墨字で『秋葉音楽祭』と書いてあったのだ。なんかロックでパンクな、一見さんお断りな雰囲気を感じてしまう。考えすぎかもしれないけど。

……な、なんか、ちよつとイメージ違うなあ……。いや、ロック系の人为主催だったらこういうノリでもおかしくないのかも?

ともあれ、ここまできて引き下がるわけにはいかない。

「と、とにかく、失礼します……!」

わたしが言い直すか言い直さないかのところで、ぎいいいい、と軋んだ音を立てて目の前のドアが開いた。

奥から顔をのぞかせたのは、まるで歌舞伎役者さんのよう

な、白塗りメイクに黒の紋様をペイントした悪魔めいた雰囲気  
の長身な男の人だった。

「ふむ、この魔界の一丁目にうら若き乙女が何用かな？」

魔界！ なんかすごいメイク！ おまけに髑髏印の眼帯！

あと衣装もなんかボスキャラっぽいきらきらでひらひらだし口  
調もなんか偉い人オーラが出てる！

この特徴的な姿は見たことがある。バンドギルドへサイクロ  
プス◇のボーカル兼ギルドマスター、アバル閣下。

地獄の旋律を布教すべく魔界から訪れた御年一万とんで二十  
五歳の魔王という触れ込みで売出し中のミュージシャンだ。曲  
調はばりばりのヘヴィメタルで、歌詞もそのロールプレイにふ  
さわしいバイオレンス&デストロイ。「汚物は消毒だ！」

「目障りな屑どもよ消え去るがよい！」とか高笑いをしながら、  
普段から布教と称してバンドメンバーとともにステージ衣  
装で街を練り歩いていて、ちよつとした名物となっている。

トレードマークは片目を隠した髑髏印の眼帯。バンドメン  
バーやファンたちは揃ってこれをつけていたりする。

まあ、一言でいうと、ちよつと……いや、かなり近寄りがた  
いコワイ人たちのトップだ。

「ひああああ、ごめんなさい間違いましたすみません！」  
反射的に頭を下げたわたしに投げかけられたのは、ちよつと  
予想外の反応だった。

「そのケースの形。ベース？ ギター？ いや、違うな。興味

深いではないか」

どうやらわたしの背負っていたリュート、〈空飛ぶイルカ  
(フライングドルフィン)〉が気になったらしい。

「その、リュート……なんですけど」

「ほほう！ 琵琶の原型であるな。なるほど、リュートなら

〈木工職人〉がゲーム時代からのメニユー製作で作成可能だか  
らか。お嬢さんは元の世界でもその楽器……リュートをたしな  
んでいたのかな？」

「い、いえ、その、昔ギターをやっていて……で、その、こっち  
に来てからお世話になった人が作ってくれたんで、それから練  
習して……。だから全然我流なんですけど、その……」

「どうされましたか、閣下」

「……閣下が、ナンパを……」

「違うわっ！ このお嬢さんが珍しい楽器を持っていてな」

「ンだよ、またか。この楽器マニアがよオ」

私とのやりとりを聞きつけたのか、そろそろとアバル閣下と  
同じような眼帯をした独特のファッションのお兄さんたち三人  
が奥から現れた。一つ目巨人の名前通りの眼帯。どうやら、  
〈サイクロプス〉のバンドメンバーがこの場に全員集合してし  
まったらしい。

「ほら、立ち話もなんでしょうから、中にお入りください、お  
嬢さん。大方フェスの参加希望者というところでしょう？」

メイクに不釣り合いな優しい口調で迎え入れてくれたのは、

たしかアバル閣下第一の腹心、邪教司祭プラード猊下……

だったかな。魔王を讃える邪教の幹部という設定で、〈サイク  
ロプス〉のプロデューサー兼メンバーだったかな。黒い〈バグ  
ズ・ライト〉で照明兼キーボードをしていた人だ。メイクさえ  
なければ柔らかな笑顔の、中肉中背の男の人だった。

「けっ。いい奴ぶりやがって」

「グルート。治癒殺しますよ」

笑顔のままプラード猊下がさらっとなんか物騒なことを言っ  
たような気がするけど、聞かなかったことにしよう……。

と、そんなことを考えていると不意に、くい、と下方向から  
裾を引かれた。

「……外から来たら靴の裏……ちゃんと、そのマットでゴミ  
を落として。雨上がりだし。泥とか。汚いの、許されざる  
よ……」

わたしの裾を引っ張ったのは、ベースの地獄門番グリッド  
兵長。大量の眷属を率いて地獄の門を守る門番という設定の  
〈召喚術師〉さん。おかつば頭と、わたしよりも二回りくらい  
小柄な身長のせいで、女の子とも勘違いしてしまいそうな見た  
目だ。悪魔メイクがなければ意外と可愛い系かもしれない。

それにしても、入口での清潔チェックって……地獄の門番つ  
てそういう意味？ ……いや、まあ、そうか。そういう門番も  
あり……なのかなあ。

「うるせえ潔癖症。外からの客に強要すんのは感心しねえな？

目エつぶってやんな。大母様に『オシオキ』されるぜ？」

「……っ」

「オラ、後で掃除なら手伝ってやつからよオ」

ドラム担当の巨漢、七罪総将グルート將軍が、ばんばんと  
グリッド兵長の背を叩く。動きは乱暴なんだけど、どう考えて  
も魔界の幹部らしからぬ常識的かつ牧歌的な会話をしているよ  
うにしか聞こえないんだけど。

「……わかった。……あと、街の掃除も」

「たく。野郎4人でフィールド練り歩いて来る日も来る日も練  
習とゴミ拾いとか、ゲーム間違っつてねえか？ マジメか？」

「グルート。約束」

「わーつてるよ！ やっぱ魔王の使徒はつれえわ。汚物は消毒  
だアつてな。ロデ研印のゴミ袋、予備あったかア？」

なんだこの見た目以外はかわいい人たち！ つていうか、あ  
の「布教」って街のお掃除だったの？ ゴミ拾いする魔王とそ  
の一派……。なるほど。〈サイクロプス〉さんたちが芸風の割  
にファン層広いのは、こういうことだったのかあ……。

「あ、あの……っ。それで、みなさんの主催してるフェスに、  
私も参加させていただきたいのですが……！」

わたしの言葉に、四人は微妙な表情で顔を見合わせた。

「うむ。我輩らは発起人の一人ではあるが、主催とはとてもお  
こがましく言えぬのだ」

「へ？」

でも、この前のフェスでもすごい盛り上がりたし、アキバでも知名度ならゆみさんと並ぶトップクラスだし……てつきり主催さんなんだと。あと、こうしてフェスの事務所に詰めてるんだし。

「我々など大母様に比べれば小物でしかありませんよ」

そう言って笑うプラード狎下。

……大母様。そういえば、さつき、グルート將軍がそんな名前を口にしていたような気がする。

「大母様は、フェスの一切を取り仕切る、文字通りのグレートマザーだ。我輩らだけでは一度勢いで開催はできても、継続開催をできる枠組みまでは作れなかったであろうな。鋼の規律と公平な機会。そして何より、音楽を愛する、フェスのトップに相応しいお方である」

アバル閣下がそこまでべた褒めする人……母、っていうくらいなんだから女性なんだろうけど、いったいどんなすごい方なんだろう。

「フェスの手続きなら、ちょうど大母様がいらつしやいますから、どうぞ。閣下、リユートとのセッションがご希望なら後ほど。よろしいですね？」

「失礼したな、お嬢さん。まずは申し込みをするがよい」

「……リユート、あとで、触らせてくれたら、嬉しい……」

「いい加減にしる。娘っこ一人に興奮しすぎだテメエら！」

あははは……。ずいぶんイメージ違ったなあ。

ともあれ、解放されたわたしは〈サイクロプス〉さんたちに会釈をしつつ、奥の事務室のドアをノックした。

「失礼します。フェスの参加申し込みにきましたー」

「どうぞ」

間髪いれず返ってきたのは、若い女性の声だった。

まるで鉄琴みたいな、凜とした口調。〈サイクロプス〉の人たちが言っていた「鉄の規律と公平な機会」っていう言葉がしっくりくる響きだ。

ドアを開け、部屋に入る。

飾り気のない机にたくさん書類が積み上げられ、そのさらに向こう側に、一人の女性が座っていた。

そこにいた人の印象を、そのまま、単語で表現するとすれば、次のような感じだ。

おおかみお面どーん。

肉球エプロンどどーん。

背筋いい座り方どどどーん。

超高速書類処理ちゅどーん。

「……〈D・D〉の高山三佐さ」

「ミサお姉さんです。〈アキバミュージックフェス〉の事務処理を担当しています」

思わず口をついてでたわたしの言葉は、ノンシークタイムの超反応速度で遮られた。

けれど、刈り揃えられた硬めの黒髪、軍人めいた硬質な口

調、残像が見えそうな事務処理速度は間違いなく、シロエさんとたまに一緒に居残り仕事をこなすあの人の姿なわけで……。

「……高山さ」

「ミサお姉さんです」

「……………」

「……………」

間合いを測りあうような、微妙な沈黙。そして。

「……あの。ミサお姉さ」

「高山三佐です」

「……………」

「あ……………」

盛大な自爆に気づいたのか、ミサお姉さん（仮）が、激しく机に突っ伏した。

「謀られました……………」

「誤解ですってば！」

おおかみお面を外して、ミサお姉さん……………もとい、アキバいちの大規模戦闘系ギルド、〈D・D〉の副官役、高山三佐さんが恨めしげにこちらを見上げてきた。

うう、罪悪感。

けど、悪意はなかったんだから許してほしいなあ……………。わたしだつてまさかあのしつかりもの高山さんが、こんなうっかりをやらかすとか想像もしていなかったのだし。

うん。今日はたまたまとっても疲れていたんだ。きつとそう

だ。あの〈D・D〉の幹部がこんなにぼんやりさんだったり愉快だったりするはずがないもん……………ないよね？

「……………〈記録の地平線〉の、五十鈴さんでしたね。お恥ずかしいところをお見せしました」

高山さんの方も、どうやら、わたしのことを覚えてくれたいたらしい。シロエさんが一度ギルメンとして紹介してくれたからかな。

「ええと……………高山さん、なんで、こんなところで？」

高山さんは、ティーポットからお茶を注ぎながら、ことの顛末を話し出した。

元はといえば、彼女がアキバの〈廃棄児〉……………いろんな理由でアキバに放り出されてしまった、親のいない子どもたちのことだ……………を相手に、廃ビルで不定期でオルガンを弾いていたのが始まりだったのだとか。

なんとこのクールビューティ三佐さん、元の世界では保育士さんだったとかで、お遊戯の一環で童謡とかを演奏するのはお手の物なんだそうだ。

「……………そうしたら、なぜか、ふらふらと音につられて、〈冒険者〉も廃ビルに来るようになったのですが」

「おお、すごいじゃないですか！」

ティーカップに4さじ目の砂糖を投入していた三佐さんは、そこで苦い顔をした。

「ですが。みんな、逃げ出してしまったんです」

「……はい？」

「ビルに入って、私の顔を見たときに『へD・D・D』の鬼軍曹だーっ!』と言われて。一目散でした」

「な、なるほど」

高山さんは今や、アキバでも特に有名な〈冒険者〉だ。

そしてそのイメージの大半は「こわいひと」「鉄の女」「鬼軍曹」といったものになっている。実際にこうして話をしてみれば、しつかりものであっても特別冷酷だったりするわけではない、年相応の女の人のなかに、だ。

以前シロエさんにそのあたりのことを聞いたところ、そうなるってしまった原因の一つには、〈大災害〉直後の〈へD・D・D〉による内部引き締めがあったのだそうだ。

〈冒険者〉みんながこのセルデシアに転がり込んですぐ、アキバでも超大手の〈へD・D・D〉には入団希望者が殺到した。寄らば大樹の陰、やっぱ頼るなら知り合いがいたり強い人のいるところ、という気持ちはよくわかる。……わたしも、そんな気持ちであの悪徳ギルド……〈ハーメルン〉に捕まってしまったわけだし。……ううん、あそここのことを思い出すのはやめよう。とにかく、そうして人がたくさん流れ込むと、当然のようないざごぎが起きる。今まで直接には見ず知らずだったプレイヤー同士が大きなトラブルもなく一致団結するなんて、それこそ奇跡みたいなものだから。

そんな中で、高山さんはギルドの混乱や自暴自棄を抑えるた

めに奔走していたらしい。しばらくは不眠不休でお風呂にもろくに入れないありさまだったとか。

とにかく、そのときの高山さんは、厳しさの象徴のように振る舞った。それが必要なことだったんだろうけれど、すっかり周囲は彼女を、規律の象徴にまつり上げてしまったのだ。

「……童謡を懐かしく思う〈冒険者〉はいるようです。それで癒される人がいるなら、それは素晴らしいことです。私自身、歌うことは嫌いではありませんし。ですが、冷たい規律の象徴、「高山三佐」のイメージでは、聴く方も存分に童謡を楽しめない……そう思ったのです」

高山さんは、自分に寄せられたイメージに対して、一切の不満を口にしなかった。大人だなあ、と思う。わたしだったら、どう見られるかとか、自分の納得とか、いろいろ悩んでもっとぐるぐるしてしまうような気がする。

砂糖瓶とティーカップとを何往復もする高山さんのきれいな指とティースプーンをぼんやりと眺めながら、わたしはふと浮かんだ疑問を口にしました。

「……それが、どうして、おおかみお面に？」

9さじ目の砂糖が紅茶に投下されたところで、高山さんはようやくその手を止めた。

「簡単な理屈です。高山三佐は怖い。童謡は怖い人が歌ったら楽しんでもらえない。ならば、と私は考えたのです」

そう口にする高山さんが、見慣れた姿に重なった。

何が立ちふさがっても決して立ち止まることのない、格好つけの、金髪の王子（わんこ）さまの、その表情に。

多分。顔立ちでなく、語る内容のせいだったのだと思う。

たとえば。前提に文句を言わず、工夫を重ねるところ。

たとえば。自分より、誰かのことを考えてしまうところ。

たとえば。細かな悩みを一足で飛び越えてしまうところ。

どれもがわたしにとってはこの瞬間、似て見えた。

そんな連想をよそに、高山さんは言葉が続ける。

「私が、高山三佐ではなくなればいい。そうです。正義の覆面レスラーよろしく、謎の童謡お姉さんになればいい。その事実

に気づいたのです！」

「……はい？」

思わず聞き返すわたしと、ふんす、と効果音をつけなくなる

ような自信たっぷりの表情の高山さん。

「つまり、それがミサお姉さん誕生の理由です。全ては必然です。証明完了、QEDです」

「い、意味がわかりませんって！」

「あ、QEDとはラテン語で、かく示されたとの意味で」

「そこじゃないですってばー！」

「え？」

わたしの意図がわからずに、きょんとする高山さん。

「……ああ、そうか。」

たとえば。すつごく本人は真面目なくせにそれが行き過ぎて

斜め上の愉快的路線をひた走ってしまう、そんなわんこめいたところまで、ルデイと高山さんは似ていたんだ——！

「あ、あの。おおかみお面である必要性は……？」

「餅は餅屋ということで、知人のかぶりもの愛好家に相談したところ、親切にもプレゼントしてもらえました。特殊な魔法がかかっている、歌声を阻害しない逸品です」

「……大丈夫？ ロデ研の商品だったりしません？」

「ご安心を。made in AKと」

それは安心できる要素が欠片もないよね？ AKつてあの山羊スライムぬいぐるみを量産したあやしいお爺ちゃんだよね？ トウヤくんが買ってきたあれがまばたきしたり居眠りしたり増えたり動いたりしたとこ、見たことあるしっ！

「ミロードも狐猿も絶対ばれない素敵アイデアだと太鼓判を」

いやそれみんな正体まるばれだつてわかっている……！

なんでよりもよつて、絶対高山さんのずれちゃった努力と

か悩みとかわかつてて、あえて面白がつて止めないでいるよう

な悪質な人たちにしか意見聞いてないのかな……？ つていう

かクラスティさん、そういうの止めずにあおつちゃう人だった

んだ！ ひどい！ シロエさんとは違うダメな眼鏡だ！

「ということ、へアキバミュージックフェス」に携わっている

私は、謎のミサお姉さんなのです。おわかりいただけました

しょうか」

はい。高山さんの周りの愉快犯たちの生態がよーく。

内心で呟くわたしに、高山さんは、ほんの少しだけ、口元を緩めた。……笑顔、なのかな？

「それより。フェスの参加をご希望なのですよね？」

あ、そうだ。当初の目的はそれだっけ。事務所の建物に入ってからこっち、あまりに濃いメンバーへのツッコミで忙しくてすっかり頭から抜けかけてしまっていた。

「は、はいっ。その、試験とか選抜とかあるんでしょうか……。」

「〈サイクロプス〉の人たちみたいにセミプロでもないし、リユートも我流なんですけど……」

「〈アキバミュージックフェス〉は、プロの集まりでもなんでもありませんよ。スローガンはシングアソング——歌を歌おう。それだけです」

シングアソング。お父さんの好きだった、古いアーティストの曲名だった。歌を歌おう。上手くなくてもいい。みんなに聴こえるように。楽しいこと、いいことを、みんなで歌おう

——。そんな感じの歌詞だった気がする。

「もちろん、少しは決まり事もありますけど。勇気と歌が好きなのが持ちがあれば、場は私たちが提供します。今のアキバには、音楽が、足りていませんから。協力してもらえらるなら、嬉しく思います」

音楽が、足りていない。

高山さんの言葉は、すとん、とわたしの心にはまった。

そう、漠然と感じていたけれど。わたしはぎこちないリユ

トを奏でることしか、してこなかったけど。それは多分、音楽が足りなかったからなのだ。

元の世界には、あたりまえのように色々な旋律が溢れていた。あふれすぎて、洪水みたいになっていたといってもいいかもしれない。

たくさん生産されて、たくさん消費されて、すごい速さで流通して、ブームが起きて、消えて、また作られて、きらきら輝くような歌詞も、旋律も、意識して挿んでいかないと、あつという間に指をすり抜けていくような、そんな状況だった。

だけど、〈大災害〉から後は、違う。

きつとあの日から、音楽は特別になった。

受動的に、いつでも素敵な音楽を選んで簡単に聴けるような環境ではなくなった。

けれどあの日から、音楽は日常になった。

プロがほとんどいなくなって、事務所も、レーベルも全て消えた世界。その中で、誰もがつらいときに歌を口ずさみ、楽しいときに浮かれて口笛を吹く。それだって、当然に音楽だったのだと、改めてみんなが気づくようになった。

それが、いいことなのか、悪いことなのか、わたしにはわからないけれど。

〈アキバミュージックフェス〉。

ここは、音楽の〈軽食喫茶クレセントムーン〉なのだ。

元の世界ではプロの料理がつきよく溢れていた。誰もが

それに手を伸ばせた。

アキバでは今、その料理の絶対量が、減ってしまっている。

音楽が、足りないのだ。だからせめて、一流でなくても、プロでなくつても、できる人が、できることをと。それが、〈アキバミュージックフェス〉なのだろう。

それで、お互いに少しでも幸せになれたなら。きっと、明日はわずかにでもましになるだろうと。

音楽っていうのは、たぶん、人間に必須な栄養素なのだ。脂質、たんぱく質、炭水化物の三大栄養素にだって、ビタミン、ミネラル、グルコサミンやコラーゲン……なんかずれてきた気もするけど、とにかくそういうなんかにだって負けないくらい、きっと音楽は大事なのだ。人はパンのみに生きるにあらずとかフリマで牧師さんが言ってた気がするけど、きっとそれは、音楽で心の栄養がないとやっぱダメだよねみたいなことを言いたかったんじゃないかと思う。

だって。〈ハーメルン〉から解放されたわたしを助けてくれたのも、楽器で、音楽だった。

それまでは当然のように浴びていた音楽が、どれだけ大事なものであったのかを、ほんの数カ月それを断られただけで、わたしは心の底から思い知った。

だから。歌を、歌おう。そう思っても、いいのかもしれない。

わたしのために。わたしの外側のなにかのために。

「それでは、少し演奏していきますか？ リュートの音色には興味もありますし」

奥に置かれていたオルガンの蓋を開け、高山さんがわたしに椅子を勧めてくれた。

突然の申し出だったけれど、わたしはなぜか当然のように、相棒のリュート、〈空飛ぶイルカ〉を取り出した。

高山さんがわたしを一瞥する。私は頷く。高山さんの細い指が、白い鍵盤の上を踊りはじめる。

懐かしいメロディ。タイトルは出てこないけれど、歌詞は忘れない。保育園で、あるいは小学校の音楽室で聞いたような、ゆったりとしたもの。いつもだったら子どもっぽくて弾くのもためらってしまうようなそれが、今はひどく懐かしくて、きゅんとする。ちゃんと練習はしたことがないけれど、耳馴染みのある、ゆっくりのテンポなら指も追いつける。

高山さんと合わせて、歌いだす。

ときに同じ旋律を。ときに、三度離れたハーモニーを。高山さんは私が少しアレンジをしてみると、悪戯を見つけた先生のように微笑んでわたしを見る。つられて笑って、わたしは元の正攻法の演奏、高山さんのところへと帰っていく。

吹奏楽部の練習を思い出す。周りの変化を感じ取り、指揮に合わせて行う一糸乱れぬ行進のような演奏。それも悪くはないけれど、この自由な、お互いを考えながらのセッションも、たまらない。

一曲目が終わり、流れるように二曲目。あまりに自然過ぎて、同じ曲を弾いていたような気さえしてくる。体を揺らしながら歌う高山さん。わたしもそれに合わせてリズムを取る。

シンブルだからこそ、テンポが遅いからこそ、抑揚が、音の伸ばし方が、呼吸が、歌声にははつきりと表れる。

高山さんのそれは、少し遠くから語りかけるようだった。近すぎず。けれど、顔が見えなくなるような距離ではなく。そんな場所に立ちながら、大丈夫ですか、こちらはここにいますよ、とたまに呼びかけてくれるような感じ。

その距離はきつと、聴く人が郷愁にひたる余地。あるいは、幼い子がまだ見たことのない世界を想像する空白なのかもしれない、なんて、ぼんやりと思った。

だって、わたしも高山さんの声を聴きながら、歌いながら、いつかのことを思い出していたから。

幼いわたしにとつては大きかった飼犬。家の周りで見た夕日。4時のチャイムに慌てて駆けだした家路。誰かと手を繋いで歌った童謡。お父さんの背中で聞いた唱歌。

お父さんってばかっこつけのクセに、昔はたまにこういう歌も歌ってくれたんだっけ。

背中であつらうつらうつらしていたわたしには、どんな顔をしていたのかわからないけど、きつと、恥ずかしがっていたに違いない。いや、あれでもプロなんだし、歌うと決めたものには完全に没頭してたりしたのかなあ。

と。

わたしと高山さんの演奏、オルガンとリュートに、新たな音が加わった。

最初は、床と机を叩く、ひどく素朴なパーカッション。

巨体を揺らし、〈サイクロプス〉の七罪総将グルート将軍がリズムを刻んでいた。

ついで、邪教司祭プライド殿下のバンドネオン、地獄門番グリッド兵長のベースが加わる。あくまで、高山さんとわたしの声を支えるように。控えめに。けれど、楽しそうに。

そして、最後に、魔王アバル閣下が、その圧倒的な声量で全てを吹き飛ばす——ようなことはしなかった。

拍子抜けしてしまうほど自然に、その声はわたしたちと重なった。普段のしゃがれ声とは全然違う、透き通った声。たぶん、わたしのポリウムに合わせてくれているのだと思う。

〈サイクロプス〉は全然ジャンル外だろうに、影みたくに当然のように、3人の声と、6人の楽器の音色が混じり合う。

ゆつくりとした三拍子。テンポを追うよりも言葉をきちんと伝える歌い方。はやりのポップスとは違う世界。楽しい。気持ちいい。それはきつとみんなの力のせいだ。トウヤくんやミノリちゃん、ルディたちとの戦いと同じ。欠けているところに手を差し伸べられて、ひっぱりあげてもらっている感じ。その事実がちくりと、胸を刺した。心地よいからこそ。たぶん、一人ではまだここには届かないと思ってしまうから。

……わたしもいつか、一人でこんな音楽ができるだろうか。  
誰かを想いながら。自分の思いを形にしながら。世界に響かせながら。プロでもない。才能もない。どこにでもいる、ただ音楽が好きただけの量産型の女の子が。

——やがて、夢のような時間が終わった。

高山さんの指が止まり、歌い終えた後の呼吸たっぷりひとつぶん後で、アバル閣下と高山さんが、わたしに手を差し伸べてくれた。

「〈アキバミュージックフェス〉へようこそ、お嬢さん」

「改めて、歓迎しますよ、五十鈴さん」

わたしはほんの少しだけわいていた気弱の虫をとりあえず蹴っ飛ばすと、二人にそれぞれ手を伸ばし返して……

「うむ、これを」

……右手にはアバル閣下から、髑髏印の眼帯を渡された。

「ぜひ、我ら〈サイクロプス〉のゲストとして」

「私からはこちらを」

……左手には、高山さんから、おおかみお面を渡された。

「いえ、ミサといはずの、二人は歌のお姉さん☆として！」

ハーモニ―は童謡のもう一つの醍醐味です！」

……ああそうだよね！ そういうオチですよね！

ちよつと演奏のときにはシリアスだったけど基本この人たちがこういう残念な方たちだったよね！ 知ってた！ でもあんまり知りたくなかった！ もつと素直に懂れてたかったなあ！

「わ、わたしへビメタはちよつとジャンル違いですし！ あと、わんこの飼い主みたいなもんではありますけどわたし自身はわんこじゃありませんしプリティでキュアっぽいお姉さんにもなれませんか！」

「っ！ 五十鈴さんは、犬を飼われているのですか？ セルデシアで？ 犬種は？ 大きさは？ どうやって手なづけたのですか？ 〈調教師〉のスキル？」

あ、あれっ？ わたし、高山さんの別の地雷踏んじやった？ 「たのもーう、ここに〈記録の地平線〉のミス五十鈴が……

はっ？ 怪しげな邪教の徒が取り囲んで……ええい、離れるがいい！ ミス五十鈴、安心したまえ。このルンデルハウスⅡコードが来たからには……」

そこに飛び込んでくる見慣れた顔の黙っていればキラキラな金髪王子様！ しかも明らかに〈サイクロプス〉さんたちのこと誤解してるし！ ああもうルディってば！

「ふはははははは、威勢がよいではないか小童めが。我が名はアバル閣下。影の世を統べる魔王である。邪教の徒風情と見まごうとは片腹痛い！」

〈サイクロプス〉の皆さんもそこで律儀に変なサーピス精神発揮しないで！

「な、なんとーっ？ そのような大物がアキバの街に潜入していたとはっ！ あと自分で閣下を自称するのはいかなものか！」

「なんでこう、事態が斜めに吹き飛んでいくかなあ！」

「なるほど。これが、五十鈴さんの言う、わんこですか」

「……ええ、ああ、その。はい」

高山さんは、魔王対勇者の寸劇を繰り広げている男性陣を見つめつつ、わたしの肩に軽く触れた。

「ともあれ。あなたの音楽を、楽しみにしていますよ」

「その……私、コピー専門ですけど……」

高山さんの言葉に、わたしは思わずくちごもってしまふ。

音楽好きの端くれにこそつと立たせてもらっている身として、作曲や作詞にはもちろん興味はある。けれど、まだちょっとオリジナルに手を出すのは、わたしにはハードルが高いというかなんというか。……お父さんに才能ないって感じのことを言われたこともあるし……。

「それも含めて、今のあなたの音楽ですから。ただ……そうです。今日、私のメロディーをアレンジするだけでしたけれど。それが、もう少しだけ膨らめば、新しい曲が生まれそうな気がする、とは思いますが」

けれど、高山さんはそんなわたしの悩みなんて小さなことのように、今度こそにっこりと笑ってくれた。ううう、マリエルさんもそうだけど、美人さんの無邪気な笑顔って、なんでもうパワフルに人の背中をぐいぐい押してくるんだろなあ。

「プレッシャーをかける気はありません。次のフェス、好きなように演奏してください。それが、私からのお願いですよ」

「は、はい。……って、もう、ルディ、勘違い！ その人は、そういうロールプレイヤーさんだけで、すごい音楽家さんたちなのっ！」

高山さんに会釈を一つして、わたしはルディとアバル閣下の間に割って入る。

そう。色々悩むことはあるけれど。わたしは音楽が好きで、他にも音楽が好きな人がいて、歌える場があるのだ。まずはそこからはじめよう。

シングアソング、歌を歌おう。

この〈アキバミュージックフェス〉は、そんなシンプルなスローガンの、集まりなのだから。

## エルフの魔王子

橙乃ままれ

〈蓄光水〉で満たされたカンテラがオレンジ色の明かりを投げかけるフロアは、ざわめきに満ちていた。復興著しいエッツ中心部、ススキノの酒場兼ホテル〈薰衣亭（くんいいてい）〉は、開店休業に近い状態ではあるが、連日繁盛している。

矛盾しているようだが、最顧客の団体である〈シルバー・ソード〉が常駐しているために、通常営業は、もう半年近く休止中なのだ。

〈シルバー・ソード〉のメンバーは総勢で百名前後たとう。

ススキノのあちこちに借家を借りてそこで寝起きするメンバーも多いが、中心的な数十人はこのホテルに宿泊中だ。正直に言えば、キャパシティーをオーバーしている部分もあるの

で、一般客に対して営業をすることは出来ないのである。

〈大災害〉あとの混乱で、〈薰衣亭〉は多少のスタッフを失った。怪我による引退はともかく、危険なススキノに愛想を尽かして別の町へ移住したり、故郷の村へと疎開してしまった者も多い。運営が厳しくなってしまった〈薰衣亭〉にとって、長期滞在の〈シルバー・ソード〉は上客であった。

そもそも〈冒険者〉は世話に手間がかからないのだ。

いずれ劣らぬ強者揃いとは聞くが、その噂とは裏腹に、誰も彼も話しかければ気さくな個人ばかりだった。いっそ気弱である

とさえ言えるかもしれない。

星型パネルをトレードマークとする〈薰衣亭〉のフロアスタッフ兼リネン係のモーシャはそう思っている。

たっぷりの食事に清掃、洗濯、そして風呂の用意さえあれば、ゴネたり怒鳴ったりすることもなく、〈シルバー・ソード〉は最高の騎士団だ。

部屋に飲食物を持ち込んで夜通し騒いだり、娼館代わりに女性を連れ込んだりする傭兵よりも、よほど礼儀正しいと、仲間とも話し合っている。

「オレンゴ汁たのむ」

よく通る声フロアから上がった。

この大きな広間は、食堂であり、宴会場であり、一応はススキノ住民の誰もが利用できる食堂であるのだが、今ではすっかり〈シルバー・ソード〉の本部として利用されている。毎晩のように名だたる剣士や戦士、魔法使いに神官が顔を突き合わせて、朗らかな宴を繰り広げるのはもちろん、その一角では〈流浪の王子〉とも呼ばれるウイリアムⅡマサチューセツツが、氏族の重鎮である〈エルフ神官〉浮世様、〈業火の殲滅師〉プロメシュース様、〈花冠の騎士〉ディンクロン様、〈家宰〉東湖様などと、氏族の運営についても話しあっている。

モーシャが小走りに飲み物を届けると、眉根を寄せて気難し

い表情のウィリアム卿が「おう」と応えてくれた。一見すると怖いイメージなのだが、モーシャは微笑んで「ごゆっくり！」と大きく返事をする。

あんな表情だが、別に不機嫌というわけではなく、治世について考えているだけなのだ、側近の浮世様が教えてくださった。それは本当のことなのだろう。その証拠に、十回に一回くらはいは、少しだけ表情を緩めて「いつも悪いな」と声をかけてくださるのがウィリアム卿なのだ。一度だけだが「店の人もみんな飲んでくれよ」と金貨の袋を受け取ったことすらある。

「なにかー」

「なにかー。こっちふたつー」

「こっちみつつー」

明るい声がいくつも上がって、モーシャは「はいはいはい。ただいまただいまー、おまちください」とくるくる忙しくフロアを回った。

〈シルバー・ソード〉は今やすっかりこの〈薫衣亭〉に慣れ親しんで、食事時でも細かい注文をしなくなってしまった。客のすべてが〈冒険者〉であり、深酒をしないとすることもあり〈薫衣亭〉では、酒飲みのための肴料理を控えている。その代わり増えたのは、ポリウムたつぶりの冒険者料理だ。

直径二十センチほどの鑄鉄の小鍋料理はその中でも好評だ。

一人前にしては大きなきし家族向けという程でもない、鉄の深皿とでも言うこの器に様々な素材とスープを注ぎ石釜のなか

でたつぷり熟したこの料理は、ススキノの名物である。しかし〈シルバー・ソード〉がこの街の雰囲気を変えてから、彼らのアイデアで大きく発展を遂げた。

かつて、この料理は海藻からとった塩味に、ボアや野禽などの獣肉と、人参と芋が入った単純なものでしかなかったのだが、今は違う。スープの種類は、塩味、煮込み骨味、味噌味、烏白湯味、辛子赤味噌味などとバラエティー豊かになった。具材も数十種類の野菜や海産物を用いるようになっていた。〈薫衣亭〉専属の〈料理人〉は〈シルバー・ソード〉の〈調理長〉であるポロネーゼ親方の弟子として学び、その腕の高まりは古参使用人であるモーシャですらほつぺたが落ちてしまうほどなのだった。

シェフが言うには、この料理技法はエルフの古伝に違いないとのことだった。

〈シルバー・ソード〉は義によつて結ばれた氏族であるらしい。

そのメンバーには老若男女、ヒューマン、エルフ、ドワーフ、その上猫人族や狼牙族さえ混じっているが、それはひとえに、盟主ウィリアム卿の掲げる理想の旗のもとに集った同志であり、義により結成した流浪の戦士団である、というのがススキノ住民が聞く〈シルバー・ソード〉の結団秘話である。

胸をときめかせるモーシャがプロメシユス様に尋ねた時も「うん、だいたいそー」という返事だったので、それはそれで

真実なのだろう。

しかし一方で、まことしやかに囁かされる隠された噂もある。

それはウイリアムⅡマサチューセツツ卿……。この謎めいた若い総領が、今は失われてしまったエルフの王国の血を残す、極めて高貴な家柄の最後の生き残りであるというものである。彼と彼の側近、つまり〈シルバー・ソード〉の中核メンバーは不思議なほどエルフが多い。ススキノにおいてエルフは決して珍しくはなく、ヒューマンに続いて多く見かける人種ではあるが、それにしてもある集団の中心が全てエルフというのはなかなか珍しい。

モーシャとしては（ここは声を潜めるところだが）、この噂は真実だと思う。

隠していても漏れ出る気品というものがあるではないか。ウイリアム卿の立ち居振る舞いは貴族の中の貴族といつても遜色ないとモーシャは思うのだ。貴族にあつたことはないけれど。

白獅子の旗をはためかせるエルフの小王国ナロウマウンツトの血を引くのか、それともトリシルティス国にと言われる妖精の係累か、はたまた滅びたと言われるフォーランドのエルフ騎士王の末裔なのか、それは分からないが、ススキノの住民たちは〈シルバー・ソード〉の領袖ウイリアム卿が、そんな高貴な出身なのだと言っていた。

だってそうでも考えないと、こんな辺境で貧しく、中央から見放されて、あげくに〈大災害〉のせいで荒れてしまったススキノを、得もないのに助けてくれるなんてありえないではないか？

料理だけではなく、縫製や、調薬、鍛冶、建築と〈シルバー・ソード〉の〈冒険者〉は多くをこの地にもたらしてくれた。その恩は計り知れない。

〈エツゾ帝国〉は、帝国と名乗ってはいるものの、その実態は田舎のならず者王国だ。その自覚はススキノ住民すべてにある。中央から蔑まれる北伐の地だ。田舎者が見えを貼って大帝国のふりをしていただけで、その皇帝の血も〈大災害〉ですっかり途絶えたという。

そんなエツゾの大地を〈シルバー・ソード〉が守り、導いてくれるのならば、こんなに嬉しいことはないと思うのだ。

一緒に創りだしてくれた、この熱々の料理のように、ススキノに沢山の幸せをもたらしてくれるだろう。

モーシャは鍋敷きに使う、焦げ目のついた分厚い木製トレイごと料理を運びながら、そんなことを考えた。

（うわあ。今日のまかないは、私達もこれかしら？）  
今日の鍋はいつにもまして凶悪な芳香を放っている。

牡蠣だ。

身のたつぷり詰まった瑞々しい貝が、白くて甘いネギや水菜と一緒に薄い琥珀色のスープの中で踊っている。モーシャは匂

いを書いただけでそわそわしてしまふほどだった。

唯一の問題点は、この料理のアレンジが融通無碍過ぎて、一度食べた味に再び巡りあうのは至難の業だということであった。材料の種類もスープの種類も薬味も多いので、名称も「〈薰衣亭〉特選日替わりのとても美味しいシエフおすすめ鍋」となっている。——当然こんな長つたらしい名前をいちいち呼ぶわけもなく（〈シルバー・ソード〉の面々に至っては覚えていられるかも疑わしい）、その呼称は省略され「いつもの」、「例の」を経て「なにか汁」、通称「なにか」となった。なにかみつ。お鍋が3つということである。（今日も皆さんたくさん食べるなあ！）

モーシャはくるくると忙しく働くのだった。



——という好意一〇〇パーセントの眼差しを受けていた〈シルバー・ソード〉の中核スタッフはといえばどうだったのか？と視線をやれば茶碗を装備でご飯を頬張っている。

〈供贄の黄金事件〉は、彼らの生活に大きな影響をもたらした。

別に敵対をしていたわけではなかったものの、〈円卓会議〉結成を蹴り微妙に疎遠になっていたアキバとの就航関係が修復されたのだ。はじめは〈記録の地平線〉シロエとの間の細かいコ

ネではあったが、ギルドマスター・ウィリアムが〈鷲獅子〉で何回かアキバに通った結果、〈第八商店街〉傘下の流通と接触を持つことに成功、これはギルドに大きなメリットをもたらした。アキバで新規に開発された文物がダイレクトに〈シルバー・ソード〉にも流れてくるようになったのだ。それは新しい魔道具や情報であることも多かつたけれど、なにはともあれ、まずは食料だった。

具体的に言うと、白くてほっこり美味しい白米だった。

話を聞くとところによると、この白米は地球世界で言うところの東北地方や北陸地方で産出されるものであり、品質の良いコメを生産する農村に対して、アキバ〈冒険者〉が全面的なバックアップを与えて新しく生まれた、新時代のコメであるのとことだ。

よくやった。

グッジョブ！

ウィリアムは（内面では）満面の笑みを浮かべて、ご飯をかき込んだ。

牡蠣入りの寄せ鍋（ちよっぴり洋風？）と白菜と昆布の塩漬け、焼き魚、白米。

ウィリアムは（内面で）勝ち誇った。

たしかにアキバはすげえ。人数も職人も段違いだ。たこ焼きとか粉物の軽食屋台にもびつくりしたが、女性向けのスイーツの店がいくつも開いていることに愕然とした。生活に余裕が有

るのも驚愕だが、ウイリアムの視点では「甘いモノを食わせる専用の店」なんてものは生活優先順位のはるか下の方にあるために、思いつきもしなかったのだ。

しかしススキノも捨てたものではないだろう。

地場の野菜、特に葉物野菜の身の厚さと甘さは特筆すべき物がある。

そして今回の鍋。

牡蠣とタラ。

ウイリアムは（壮絶な表情で）微笑んだ。

これは、勝っただろ。シロエさん。

アキバに突き放されていたと思っていたエツゾだが、捨てたものではないのだ。噛みしめるたびに濃厚と言っても良い旨味が広がる。

「なんで殺気だしてんですか？」

「ウイリアムだから」

東湖のボヤキにプロメシユースがいい加減に答えた。その二人も優雅に箸を使っている。和装の東湖はともかく、美形エルフであるプロメシユースが箸を器用に操ると違和感が大きいのだが、それを傍目に浮世は「おかわり欲しいってことでしょ」と手を差し出して、「お、おう」と頷くウイリアムの茶碗におひつから白米をよそった。

このお櫃は九〇レベルの採取クエストで入手できる〈千年ケヤキの枯木〉から作られた無駄に高性能で荘厳なものなのだ

が、そのお櫃に厨房直送の白米が移されている。それは、ご飯のおかわり程度でウェイトレスを呼ぶのは申し訳ないという遠慮でもあるのだが、一方で白米に対して執着の薄い〈大地人〉には説明が面倒くさいので自分たちでやってしまおうという、〈シルバー・ソード〉の意識の表れでもあった。

「さんきゅな」

と低い声でつぶやいたウイリアムは、白米の輝く茶碗にしばらく視線を落としたあと、唇の端を上げるように表情を緩めて、また一口噛み締めた。

「なんなんだかなあ、デインクロン？」

話を振られた優しい風貌の長身のエルフは、きよんとしたまま「美味しいんだろ？ うまいじゃないか」と返す。その返事に言葉に詰まるプロメシユースは、そのままやり取りを続けるのを断念して「おまえら、子供か」と笑って、自分も食べ進めた。

食事の時間は短い。

年若いウイリアムにとっては特にそうだ。

ましてやそれがめつたにないほどの美味ともなれ自然とペーヌは上がり、三十分とかからず満腹になってしまう。〈冒険者〉の身体は地球のそれと比べて健啖だが、それでも二倍も三倍も食べられるものではない。

満足したという最大級の感情を込めて、手元の果実水を飲んで強く頷くウイリアムに、偶然視線のあった浮世は「なによ。悪いわね。ちょっと待っておきなさいよ」と零した。

彼女は女性らしく綺麗に揃えられた箸で、小さくわけた白菜を丁寧に使っているために、まだ半分ほどしか食べ進めていない。

見かけの優美さの割にかなり豪快な量を食べるディンクロン。そもそも食の細い東湖。要領の良いプロメシユース。そして現役高校生であるウイリアム。

男性陣に比べ、浮世の食事は遅い。

でも、だからといって別に不快なわけではないし、そもそもそうである理由は、浮世が食事中もみんなのおかわりを受け付けてくれていた訳なので、ウイリアムはむしろ罪悪感を覚えた。

そこで（謝罪の意味を込めて）眉根を寄せたウイリアムは「ゆっくり食ってくれ」と返事をする。

至極まっとうなことを言っただけに、ニヤニヤするプロメシユースと東湖が「かわいいなあ」「かわいいですねえ」と言い合うのが不快で、そっぽを向いてやった。

それに食事を終えたからといってすぐさま部屋に帰るつもりもないのだった。

この世界は〈エルダー・テイル〉であるのだから、〈エルダー・テイル〉はない。つまり、部屋に戻ってもモニターに向かってMMOをやることは出来ないのだ。そうであるならば、ウイリアムとしても、この広間でまだ友人たちに囲まれていたほうが楽しいと思えた。

それに夕食を終えたこの時間は、なかなか重要な時間なのだ。

大規模戦闘でススキノを離れている間は集団生活なので、互いになにをやっているかすぐに分かる。むしろ把握していなとなれば、敗北は目の前だと言っても良いだろう。

しかし、こうして街に住んでいる間、大規模戦闘メンバーも個別の自由行動だ。なにか相談をしたり、連絡を交わしたりするチャンスは、朝食の短い時間か、夕食後の団欒に合わせるということになっている。

大規模戦闘を好む〈シルバー・ソード〉とはいえ、そのメンバーすべてがそれに参加できるわけではない。戦闘にトラウマを抱えてしまったメンバーもいるし、そもそも大規模戦闘には人数制限もある。そういった控えのメンバーと交遊するのも、こういった時間の役割だ。

ギルドマスターであるのだから、一日中とは言わないものの、団欒の時間は指定席で鷹揚に構えているべきだと、ウイリアムは東湖に諭されて、それもそうかと実践している。

「護衛組、うまくやってるかな」

「気になるなら〈念話〉すればいいではないですか？」

ポツリと漏らしたつぶやきを東湖に拾われる。

「仕事で迷惑だろ」

ウイリアムは口をへの字にして返した。

「ポロロッカが暴走しなけりゃ平気だろ。しつかりした依頼だし」

プロメシュースがワインを傾けてゆつたりとそう言った。

現在〈シルバー・ソード〉は最先端の大規模戦闘にとりかかってはいない。〈供贄の黄金事件〉で〈奈落の産道〉を攻略した〈シルバー・ソード〉は、その余勢を駆って〈赤巨人の山砦〉〈白巨人の海砦〉というふたつの八十五レベル、及び九十レベルの大規模戦闘を攻略した。というのも〈供贄の黄金事件〉で得た最強クラスのアイテムと、消耗品補充素材の恩恵があったればこそだ。

しかし矢弾にせよ水薬や消耗資材にせよ無限にあるわけではない。アキバからの購入とあわせて〈シルバー・ソード〉は二軍の鍛錬を始めたのだ。

〈供贄の黄金事件〉突破は、攻略メンバーだけではなく控えのメンバーや新人にもプラスの影響を及ぼし始めていた。〈北海の鱗王〉や〈雪原の哀歌〉といった六〇レベルから七〇レベルの大規模戦闘に、一軍から数名の引率をつけたうえで控えのメンバーを送り出す。そういった事情で、ウイリアムたち中心メンバーはススキノで留守番だ。

そのほかにもいくつか送り出した小人数部隊はあり、そのひとつがポロロッカとエルテンディスカ、ヴォイネンによる護衛部隊だった。

目的地はアキバ。〈水楓の館〉。

侍女長の依頼でレイネシア姫の身边を警護する任務である。

「あっちも大変みたいですねえ」

「人数が多ければそれだけ悩みも深まるのだろう」

これも食事を終えたディンクロンが穏やかにこたえる。

彼の手元のカップには、ミルクのたっぷり入れられた蜂蜜茶——〈大地人〉からの差し入れた。ディンクロンは〈シル

バー・ソード〉を代表する「騎士」としてススキノの〈大地人〉から、ウイリアムに次ぐ人気を得ているのだ。

「だからこそ、だろ？」

「ああ」

プロメシュースから横目の視線をちらりと向けられたウイリアムは、しつかりとうなずいた。

「ああ。だからこそ、今度は機を見逃すつもりなんかねえよ。

つまらねえ思いは、一度でたくさんだ。今度は、アキバの大規模戦闘に、俺たちが殴りこみだ」

ウイリアムは、まるで確認するかのように、単語のそれぞれをはつきりと区切って口に出した。

アキバに帰るといっわけではない。

いまとなってはこの城塞都市ススキノに愛着を感じている

ウイリアムたちだった。地元の〈大地人〉も何くれとなく寄ってきてくれ、笑顔を向けてくれる。自分たちのようなゲーム廃人の集団がこの街になにほどのことが出来たのか、ウイリアムは全く自信がないが、それでも求められるというのは、良いことだと思ふ。

だがしかし、ウイリアムら〈シルバー・ソード〉は大規模戦闘集団なのだ。もしそこに戦場があるのであれば、馳せ参じるのがその存在意義である。ましてや今回のそれは、アキバから逃げた自分たちにとって雪辱戦なのだ。

ススキノで安定した生活基盤が出来た現在、アキバとミナミ、そしてイースタルとウエストランドの間の闘争に関わるのは大きな不利があるのではないか？ デメリットしか無いのではないか？ そういう意見もあった。

というよりもそんな懸念に胸が塞ぎ、長い間仲間にも相談できなかつたのはウイリアム自身である。

シロエからの頼みもなくそんな決心をするのは差し出がましいのではないか？ 自意識過剰のおせっかいではないか？ そう悩んだりもした。

しかしそんなウイリアムの憂悶を晴らしてくれたのは、やはり仲間であった。

腹黒眼鏡に恩を売ろう。

今度の祭りには乗り遅れないようにしよう。

でかいイベントに欠席とかまじでありえない。

騒ぐのが俺らの仕事だろ。

悩んでいたウイリアムが馬鹿らしくなるほど、仲間たちはぶたつ返事で賛意を示してくれた。やがてくるアキバでの一大決戦にむけて、ウイリアムたち〈シルバー・ソード〉は力を蓄え始めたのである。

その一環がススキノナーナコソーナラシノの間の輸送海路安定作戦であり、イースタル北部の領主たちに対する表敬訪問や社交であり、〈水楓の館〉警備の人員派遣だった。

ウイリアム自身が驚嘆してしまうが、それらは出来たのだ。

たかが高校生上がりのゲーマーが、領地を統治するような海千山千の大人を相手に面会することも、頼みごとをすることにも、頼みごとをされることも。海辺の村まで出かけて、クエストにない交渉で宿を借り、時間をかけて海の魔物を討伐することも。どう考えたって専門的な仕事であるはずの護衛任務に、それでも一応の訓練をした仲間を送り出すことも。

出来たのだ。

それがウイリアムにとっては、嬉しくて、そして悔しい。

ウイリアムが無理だ、できっこないと思っていたことも、仲間にも相談すれば、全く知恵が出てこないということとはなかった。

もちろんそれは、たとえば貴族相手の礼儀作法なんて、穴だらけだっただろう。なにせウイリアムときたら、晩餐会どころかコース料理を食べた経験だって薄かったのだ。

しかしそんなのは些細な問題だった。知り合いから知恵を集めて、体当たりで出かけてみて、非礼をしたと感じれば頭を下げれば、話することは可能だったのだ。恐れていたように、激怒した貴族に剣を抜かれるようなことなど、一度もなかった。

すべてが上手くいったわけではない。失敗もあった。しかし、試行錯誤をして取り戻せないほどのそれは、なかった。その多くは、ここにいるプロメシユースや東湖、浮世が出てくれた知恵のおかげであり、ウィリアム自身は「うん」とか「お」とか応えるしか出来なかつたのではあるが、それそのものは卑下するつもりはない。なにしろ彼らはウィリアムの友なのだ。その友が思ったよりもずっと有能で、知恵があつたということ、責めたり嘆いたりする心は、ウィリアムにはない。

しかしだからこそ、ウィリアムは悔しかった。

〈大災害〉直後のあの時、ウィリアムは〈円卓会議〉の成立や周辺地域の安定など、出来るわけがない、時間の無駄だと思つたからこそ席を蹴つた。だが、それは間違ひではなかつたのか？ あの時残つていても、今この時のように、ウィリアムの仲間たちは知恵を出し、様々な手助けをアキバに出来たのではないか？ そんな悲しくいたたまれない気持ち湧き上がってくる。仲間たちの能力を信じないことによつて、その可能性を閉ざしたのは、ウィリアム自身なのではないか？ それが、悲しく、そして悔しい。

「ねえ。わたし、ガトーシヨコラをたべたいわ」

「は？」

考えに沈み込んでいて（本人は全く不本意な）気難しい洗面を作つていたウィリアムに、いつの間にか食事を終えた浮世がそんな言葉をかけた。

「アキバの。〈ダンステリア〉っていうお店が、もう、ものすごく美味しいらしいのよ！」

「ああ、この間の話か」

「そこでね、ガトーシヨコラを食べたいわ。香ばしい香りの」  
「お、おう」

ウィリアムはその勢いに気圧されて、こくこくと頷いた。

仲間とはいえ女性の思考はよくわからない。

たつたいま腹がさけるほど牡蠣鍋を食つたではないか？ その直後に甘いモノを食いたいだとか、正気を逸しているのではなからうか。

「ゲルメツアーね！」

雄々しく拳を握つてふんすふんすと鼻息を荒くする浮世に、プロメシユースがいつになく優しい視線を向けて「観光。いいね」といった。

「いいね」

「楽しみですねえ」

デインクロンと東湖も、頷く。

なにかがあれば別なのだが、このメンバーは長口舌が少

ない。

いいね。いいね。賛成だ。じゃあ行こうか。

それで済む。そしてそれは、ウィリアムにとつて居心地が良く、塾よりも、学校よりも安心感を感じさせる居場所なのだった。頬が緩みそうになるのを（威厳を保つために必死に）こらえたウィリアムは、同じように「そうだな」と答えた。

アキバの街に遠征だ。

それはこの日から〈シルバー・ソード〉の行動指針となった。ひとつの大規模戦闘が終わり、次のそれが始まる。〈エルダー・テイル〉は決して終わらないのだ。ずっと。ずっと。

「なに難しい顔してるのよ〈廃人王子〉」

「そうですよ。クソゲーマーなんでしょ〈廃人王子〉」

「根を詰めるなよ〈廃人王子〉」

三人からツッコミをうけたウィリアムはこめかみをひくつかせて怒鳴り声を抑える。普段は言葉少なくアット・ホームな雰囲気なのに、〈奈落の産道〉であんな演説をぶちあげてしまつてから、仲間たちはこうしてからかってくるのだ。反論したところで、恥ずかしいことをさんざん喚き散らしたのはウィリアム自身なので、ちつとも堪えてくれないばかりか、さらなる攻撃を受けるはめになり、受け入れるしか無いのが最近のウィリアムの最大の悩みである。

こうして〈シルバー・ソード〉が力を蓄える新しい日常の間は流れていった。



「はわわわわ。やっぱりそうだったんだ!!!」

廃人、というゲーマー用語がわからない〈大地人〉が誤解した「廃王子」という言葉が、ススキノの街を駆け巡っていること。その言葉がウィリアムが亡国の王子だという説に、大いに説得力を与えていること。そして、それがまわりまわつてウィリアムたちの未来に影響を与えるということ。

それをウィリアムたち〈シルバー・ソード〉は知らない。

はわわわわ。はわわわわ。と取り乱したモーシャが厨房に駆け込み、飛び上がって報告するのにも気づかず、ウィリアムは友達との騒がしい夜を過ごすのだった。

## 晩秋のとある居酒屋にて

山本ヤマネ

「でもさあ、カレにも結構やさしいところあるんだって」

「へー」

「この前だって、雑誌に出てて気になってたカヌレ、並んで買ってきてくれたし」

「へー」

「そりゃあ、もうちょっとちゃんと働いてほしいけどさあ」

「へー」

「ちょっとユカちゃん、ちゃんと聞いてるう？」

「聞いてますよー」

カウンター席に座る髪を明るい色に染めた女性が、ハイボールのジョッキを抱え込むようにしながら口をとがらせる。

とはいえ相手はよっぱらいだ。最初こそちゃんと相手をしていただけけれど、同じ内容が三週目に突入した惚気とも愚痴ともつかないものにマジメに付き合い続けるのは、独り身の私にはいろんな意味でダメージが大きすぎるのだ。

あとカヌレってなんだろう。

都内の某歓楽街。その裏道の雑居ビルに居を構えるここは、大衆割烹「梟の罫（ふくろうのねぐら）」。

若くに旦那様を亡くした女将と、その旦那の弟子だった板前の崎本さんが二人で切り盛りする、いわゆる居酒屋と分類される飲食店。

そして週に三回ほどホール係兼雑用のアルバイトとして働く、私の勤務先だ。

つい先週まで夏の名残りを見せていた街の空気は、ひとつ週末をまたぐと秋をも通り越してしまっていた。

日もしっかりと暮れたこの時間ともなると、衣替えをしそねた装備では外を歩くのには冷気耐性の数値が足りないらしい。普段であれば週の半ばであっても、夜になればそれなりに賑やかなこの某歓楽街なのだけれど、今日に限っては外を歩く人の数も明らかに少ない。

そんな街の雰囲気のせいもあって、今日の客入りはいつもとくらべると随分とささやかだ。お客様といえば開店直後からいつもの壁際の席に陣取っているタバコ屋のご隠居と、少し強めの化粧をした顔を赤く染める目の前の彼女、ヒナタさんの二人のみ。

タバコ屋のご隠居は、もう料理も酒も一段落したらしく、お気に入りのパイプを片手にぶかりと紫煙をくゆらせている。店の女将さんは、その向かいの席に座り、頬杖をつきながら窓の外の色を眺めている。

板前の崎本さんは包丁を研ぐとか言つて奥に入ったあと、もう三十分あまりも戻つてこない。

そうしてカウンターにひとり取り残された私は、惚気を繰り返す彼女を援護射撃もなく独りで相手しなくてはならないと、そういう状況だったりするのだ。

「はい、チェイサー。ヒナタさん、今日はちよつとペース早いから。ちゃんと水も飲まないと思つてよ」

「えー、まだまだ大丈夫だつてえ」

どうにか話の合間に割り込んで、レモンをしぼつた水をカウンターに置く。するとヒナタさんはそのグラスのふちを指でなぞりながらふにやりと笑う。

彼女は近所のキャバクラで働くホステスさん。出勤前の同伴でも、今日のようなプライベートでも、うちの店をよく利用してくれる常連さんの一人だ。

しかしその道のプロとはいへ、美人というのはずい。

赤く染まった頬やとろんと力の抜けたような目とは、どう見てもただの酔っ払いのそれだというのに、どこか色気を漂わせている。私が同じだけの酒量を口にすれば、顔だけでなく全身を真っ赤にしてへべれけだというのに。

なんでこうも差がつくの。彼女と私とでは歳もたいして変わらないというのに。

「ユカちゃん、なんだか眉間にしわが寄つてるう。シヨックだな、私の相手をするのがそんなに嫌なんだあ……」

ヒナタさんは顎をちよつと引くと、唇に一本指をあてて拗ねたような表情を顔に浮かべる。

ぐぬ、それだ。それがずるいと思うのだ。

「いやいや、そんなことはないし。でもほら私さ、彼氏とか居たことないからさ、ヒナタさんのことが羨ましくつてさあ」

とはいへ、嫉妬はあつてもヒナタさんを嫌うとかいった感情は私にはない。

客の平均年齢が高いこの店では、ヒナタさんは唯一に近い年代で同性の顔なじみだ。私としてもバイトと客の関係というよりも友人に近い感覚を彼女には持つていたりする。

「ほんとに……?」

「本当ですよー」

まあ彼女の方も本気ではなくて、これも何度も繰り返したいつものやり取り。

洗い場でグラスを磨きながら、この「本当」が「嫌じゃない」ことなのか「彼氏居たことない」のことかはわざと誤魔化したまま、私は曖昧に頷いたりする。

「えー、それはちよつと信じられないんだけど。なんでユカちゃんにオトコがいないわけ? 全然意味わかんない。ていうかバイトしてない普段って何してるのよ?」

「え、えつと。大学通つたり、パソコンしたりとか……?」

「ほんとにいく？」

だが、今日のヒナタさんは、それを曖昧なままにははしてくれないらしい。妙な所にスイッチが入ってしまったらしく、ずいっと身を乗り出してくる。

私はその勢いに一歩あらずさりする。おまけにその質問は私にとつて非常に答えづらいものだったりするわけで、どうごまかそうかと返した言葉の語尾も小さくなってしまふ。

友人のように思っているとはいえ、彼女は私とはだいぶ違ったクラスタに所属する人種だ。正直に「暇があればネットゲームばかりしてます」なんて言ってしまうばドン引きされてしまうことは想像に難くない。

「スマホとかじゃなくてパソコン？ それって勉強とか？ そんなに大学って大変なの？」

「ああ、ええつと…… いや、勉強ってわけじゃないんだけど……」

「怪しいなあ。なんか隠してない？」

「アヤシクナイデス……」

ヒナタさんがこちらの心の中を覗き見るかのように目を細める。私が斜め上に目をそらす。

からころん

そんな絶体絶命の瞬間、私を救う福音が訪れる。新たなお客

様の来店を告げる、のれんにかけている鈴の音だ。

「あっ！ いらっしやいませ！」

このタイミングを逃すわけにはいかない。私は不満げな表情でらむヒナタさんを尻目に、急いで店の入口へと向かう。

向かったのだが。

「うむ、なるほど。なかなか味のある雰囲気のお店じゃないか」

「げっ、小豆子（あずきこ）……」

私はのれんをくぐって店の中に入ってきた長身の女性の姿を見て硬直する。

それは、今の流れるにいちばん遭遇しなくなかった私のネットゲーム関連者。多人数同時参加型オンラインRPG、いわゆるMMOにおいて同じギルドに所属するゲーム仲間。

そのリアルの方の姿だったのだ。



しっかりと磨きのかかった一枚板のカウンターの席には、二人の女性客が並んで座っている。

一人はもう一時間以上も前からその席に座っているヒナタさん。どうやら彼女は隣の客に随分と興味があるらしい。さつきまでとは違って口数も少なく、時おり思い出したかのようにハイボールのジョッキに唇をあてつつ、頻繁に横を伺っている。

そして今しがた席についたもう一人、チャコールグレイのパ  
ンツスーツに軽くウェーブのかかったショートヘアの中性的な  
雰囲気を持つ女性の方は、カウンターの正面というか私の顔を  
眺めながら肘をつき、口元には薄い笑みを浮かべている。

新しいお客様の来店ということで、一度は奥から出てきた女  
将も、場の雰囲気からその客が私の友人だということを察した  
らしい。「ごゆっくりね」と優雅に微笑むと、再びご隠居の座  
るテーブルへと戻っていつてしまった。

確かにこの妙にきりつとしたハンサムな女性は私の友人では  
ある。少なくとも週の半分くらいは顔を合わせて会話をすると  
なれば、だいぶ親しい部類と世間的には類されるのだろう。

とはいえその殆どがゲームを介在したネット越しのこと  
だ。チャット機能によって彼女の声色こそ知ってはいるもの  
の、実際の姿を目にしたのはオフ会での数回のみ。片手の指で  
数えられるほどではない。

そんな彼女が私のリアルのこんな場所に唐突に現れるなんて  
いう事故は、本来であればありえない筈なのだが。

「ヤエか……」

「うむ、ヤエだな。次の〈大規模戦闘〉の〈幻想級〉配分権で  
吐いた」

「ぐぬ、あの欲の権化め……」

私の低いつぶやきに小豆子が頷く。

ヤエというのも同じゲームで知り合った友人だ。しかしヤエ  
の方は小豆子よりもずっと付き合いが長く、それは私が中学生  
だった頃までも遡る。

それだけ長い付き合いに加えて、リアルで住んでいる場所も  
近かったこともあって、そのヤエとはゲーム以外でも頻繁に会  
う機会が多く、彼女だけはこのアルバイト先も知っていた。

「ネット越しの相手にはみだりにリアルの情報を流すのは危  
険だにやあ」というのは、私とヤエのゲーム内でのお師匠様  
のお言葉だ。それがなくともゲーム内での友人がこの店に頻繁に  
やってくるなんてのは私としても願い下げだ。どうせあいつら  
は私をからかって遊ぶことしか考えてないのだ。

というわけで、ヤエには口を酸っぱくしてこのバイト先のこ  
とはばらさないようにと言いつけていたのだが、ゲーム内  
の希少アイテムを獲得するための権利をちらつかせられて、簡  
単に口を割ってしまったらしい。

「なに飲む？」

「そうだな。まずはビールというのが様式美だろう。グラスで  
たのむよ」

私の注文の催促に、小豆子は顎に指をそえつつ、妙に優雅に  
答える。注文の受け答えの言葉も、私が出したお手拭きを使う  
仕草もどこか芝居がかかっている。

ゲームの中でもオフ会でも、彼女はこんな不思議な口調で

喋っていたのだけれど、それはどうやらゲームからは離れたところなどでも徹底されているらしい。生粋の変人なのだ。

「ほい、グラスビール。それからお通し。蛸の桜煮」

「なんだ。随分と接客の態度が悪いじゃないか？」

小豆子は不満ですとでも言うかのように小さく首をかしげるが、彼女のその顔に浮かんでいるのは、まるで楽しいオモチャを見つけた子供のような笑顔だ。悪い予感しかしない。

「まあ、予告もなしに顔を出したのは悪かったと思っただけがね。それにしたって愛想笑いくらいはする努力をしたほうがいいぞ、くしやた——」

「さて、ちよつとまで！ 違う！ 私の名前は大江悠加里だ。オオエでもユカリでも好きに呼んでいいが、リアルでソレはやめろっ！」

「……ふむ。では親しみを込めてユカリと呼ばせてもらおう」  
今度こそ小豆子の顔には満面の笑みが浮かんでいる。

彼女が言いかけた「櫛八玉（くしやたま）」というのは、ゲーム内での私のキャラクターの名前。それはいわゆるペン

ネームみたいなもので、ゲーム内で呼び合う名前にもなる。だから彼女が私のことを「櫛八玉」と呼ぼうとするのは、まあ自然な流れではある。あるのだが。

この「櫛八玉」というのは中学生だったゲームを始めた頃の私が自分のアバターにつけてしまった日本神話のマイナーな神様の名前だ。まさに中二病というやつだったのだ。

そんな名前がバイト先にまでもばれてしまったら、この先、私は羞恥心でここで働けなくなってしまう。

「へえ。ユカちゃんのそういう顔って始めて見るかも。こちらはお友達さん？」

「はい。クシ……じゃなかった、ユカリとは親しくさせていたでいております。戦友のようなものですね」

「戦友ってなんだ。違うから。ただの友達だから……」  
さつきから興味津々といった表情で横から私たちを眺めていたヒナタさんが、とうとう私たちの会話に加わってしまう。

「はじめまして。私（わたくし）、ユカリの友人で、笹下梓（ささげあずさ）と申します。そうですね、親しみをこめてあずにゃんとでも呼んで頂けると嬉しいですね」

「ふふふ、じゃあ私のこともヒナタって呼んでちょうだいね。  
まあ源氏名ただけどきー」

「いや、なんだよそれ。あずにゃんってなんだよ……」

居酒屋のカウンターともなれば、来店した見知らぬ相手と会話が弾むなんていうことは珍しいことではない。特にうちのように常連相手が大半といった店であれば、殆どのお客様同士は

既に友人のようなものだし、仕事の合間にはその会話に混ざったりするのだってウエルカムなのだけれど、今日ばかりは全くもって歓迎できない。いつ小豆子が変わる事を口走らないかとこっちとしては気が気ではないのだ。

「それでね、その彼氏がさあ、ちよつと気が利かなすぎってどうかさ、もうちよつと私をちゃんとかまつて欲しいっていうかさあ」

「なるほど、わかります。世の男どもには紳士度が全く足りていない。ましてやヒナタさん程の美人を相手にその態度とは、けしからんとしか言いようがないですね」

「そうなのよ、本当にさ。せめてもうちよつとちゃんと働いてくれればさあ」

「ですね、全面的に肯定いたします」

「あーあ、あずにゃんが男の人だったらよかつたのになあ。そうしたら私ほつとかないんだけどなか」

「いやいや、私なんてそう大したものでもないですよ」

そんな私の気持ちとは裏腹に、カウンターの二人は妙に盛り上がっている。

しかし小豆子、その道のプロである筈のユカリさん相手にそのこなれたムーヴはなんなのだ。お前はホストか。ホストクラブのクラブのホストか何かか。区役所の一般事務枠というのはそこまでの話術を必要とする職場だというのが。

「ユカリちゃん、料理の注文は取ったのか？」

客同士で盛り上がっている雰囲気から危険は去ったと判断したのか、それともさすがに包丁研ぎにも飽きたのか。酔っ払ったユカリさんに絡まれることを恐れてずつと奥に隠れていた板前の崎本さんが顔を出す。

「あ、はい。おい小豆子、ヒナタさんと盛り上がるのは勝手だが、そろそろ何か注文をしる。うちは大衆割烹だ。酒と料理を楽しむ店だぞ」

「どうぞユカリ。私の呼び名はあずにゃんだ」

「ぐぬ。……あ、あずにゃん、次のお酒と料理は何に、……いたしますか？」

「うむ、よろしい。確かにこのような楽しい場をより盛り上げるには、舌への刺激も有用だろう。とはいえさて、何をお願いしようか。どれも魅力的に見えて困るな……」

一瞬は勝ち誇った顔をしていた小豆子だけれど、私がお品書き差し出しすと、それとカウンターのガラスケースを交互に眺めながら、口をへの字に曲げる。

ながあずにゃんだ。小豆子のくせに。そして悩め、悩むがいい。そしてうちの味に驚くがいい。

いつも不機嫌そうな顔をしていて愛想が全く無かったり、若い女性客に絡まれたりすると私を見捨ててすぐに店の奥に逃げ出したりはするけれど、銀座の料亭で働いていたこともある崎本さんの料理の腕は確かだ。

小豆子なんぞは崎本さんの料理にやられて財布を軽く、そのぶん体重を増やして帰ればいいのだ。

「ねえ、あずにゃん。それだったらさあ、ここはユカちゃんにオマカセしちゃわない？ 古参の常連客の遊びでね、お客さんに合わせた料理とお酒をユカちゃんに選んでもらうっていうのがあるのよ」

「ほほう、それは興味深いですね」

「というわけでユカちゃん、オススメの料理とお酒、二人分お願いね」

「ぐ、ぐぬ……」

そんな風に想像の中で小豆子に反撃して暗い笑みを浮かべていた私の思考は、ヒナタさんの言葉で現実呼び戻されてしまふ。ヒナタさんめ、なんでそんな余計な事を言うか。

彼女の言うように、古くからの常連さんたちは基本的に店のメニューを見ない。「そのアジが食いたい」とか「串何本か適当に」とか「オススメを軽く」なんていう注文がほとんどだ。おまけにここ最近、「ユカちゃん、なにか選んでー」なんていう非常に困った注文方法も流行ってしまったいたりする。

とはいえ私はただのアルバイトだ。食材の目利きなんてことに關しては全くの素人だし、お酒にだってさほど詳しいわけじゃない。

「……崎本さん。今日魚で良いのってどれ？」

「どれも美味しい」

「ぐぬ。じゃあお酒は？」

「不味い酒は入れてない」

「ガツデム」

ダメ元で崎本さんに泣きついてても、返ってくるのはいつもどおりの何の参考にもならないお言葉。崎本さんがこうだからお客様たちは私にオススメなんてものを聞くようになったのだ。たまには協力してくれたってバチは当たらないと思うのだが。

私がつくりと肩を落とした後に、カウンターに並べられた食材たちに視線を流す。そして、ひととき思考をめぐらせる。

ヒナタさんは同伴やアフターにうちを利用するときには（客のオゴリなので）ウニとかトロなんていう高いものばかりを注文して店の売上に貢献してくれるのだけれど、今日のように一人で来店すると、から揚げやつくねみたいな料理を頼むことが多い。となれば繊細なものよりも、味のはっきりとした料理の方が良いのだろう。

スズキは違う。アマダイもそうなるエイマイチ。甘エビは悪くはないけれど、もうちょつとボリュームが欲しい気がする。

そうやって悩んでいた私の目に、大きく広げた手のひらほどもある白く平べったい円盤上の物体が映る。

「あつ、じゃあこのホタテとかどうかな。これだけ大きければ刺身もバター醤油も両方出来ちゃいそうじゃない？ うちの北海道産の天然ものだし今が旬だから、きつとすごく甘いと思うんだよね。でもって、合わせるお酒は……」

後ろを振り向き、こんどは奥の冷蔵庫に並んでいる日本酒の一升瓶に目を向ける。

うちの店に並んでいるお酒は、これまた常連でもある老舗の酒屋さんが仕入れてくれている。いつも安くて美味しいお酒を取り寄せてきてはくれるのだけれど、「今日は珍しくこれが手に入った」、「こいつは一度飲んでみるといい」なんて言いながら毎回違うお酒を持ってくる。そのせいで私のような素人は、ラベルを見ただけではその味がわからないのだ。

私がそうやって首を傾げていると、崎本さんが小さなおちょこを差しだしてくる。これは味見をしても良いという合図だ。

とはいえ全部の酒を味見するというわけにもいかない。

ホタテの強い甘みにも負けないしっかりとしたお酒。でも普段日本酒を飲みなれていない人にも美味しいと思ってもらえるクセがあまり強すぎないお酒。

おぼろげな記憶から味を予想してひとつの瓶を手取る。そしてちよつとだけおちょこに注いでまずは香りを確認。そしてひと舐め。

「うん、これでいいかな。お酒はこれ。〈雨後の月〉っていう広島のお酒。香りや飲み口がすごくフルーティーだからヒナタさんも気に入ると思う」

「判った」

腕を組んでじつと私を睨むようにしていた崎本さんは小さく頷くと、カウンターに並べられていたホタテを二枚、慣れた手つきで開き始める。私も慌ててお酒をふたつの徳利に一合ずつ注ぎ、カウンターの二人の前にグラスと共に並べる。

「ほい、とりあえずお酒から」

「うむ。ではありがたく頂こう」

小豆子は酒を手酌したグラスを手を取ると、またも芝居じみた身振りで店の照明にかざすように持ち上げる。

「ふむ、かすかな琥珀色が美しいな。このシンプルなグラスにも随分と映えるじゃないか」

「いや、無濾過の原酒って大体そういう色だから。度数高めだから調子乗って潰れるなよ。あと小豆子に出したそのグラスは合羽橋で売ってる安物の量産品だから」

「それに〈雨後の月〉という名前も詩的だ。雨上がりの夜にうつすらとかかる雲。その合間から微かに覗く月の明かり。日本酒とは随分とロマンチックな酒なのだな」

「いや、日本酒の名前なんて大概だぞ。半分は中二病でもう半分はネタだ。〈モヒカン娘〉とか〈最低野郎〉とか〈ブース

カ〜とかもあるからな」

「ほう、とても香りが強くて舌触りもしっかりしているのに、随分と余韻が爽やかなのだな」

「うん、まあそうだな……」

突っ込みどころしかない小豆子の言動なのだが、味の感想だけは私の思った通りのものが返ってくる。

「本当だ。結構甘く感じるのにべたつとしないのね。日本酒ってあんまり得意じゃないけど、これはすごく美味しいかも」

ヒナタさんは赤い江戸切子のグラス（こっちはちゃんとしたものを出した）を両手の指でちょこんと持ち上げて一口舐めると、目を大きく広げて驚いたような顔をする。この反応であれば、どうやら間違いはなかったらしい。

私はほっと胸をなでおろす。しつこいようだが私はただのアルバイトなのだ。お客様の好みそうな料理やお酒を選ぶなんていうのは、たとえそれが気心の知れたヒナタさんが相手であっても緊張してしまう。小豆子はまあどうでもいいが。

「刺身あがった。持って行ってくれ」

「はいはい」

急いで厨房に戻り、崎本さんが差し出す九谷の皿を受け取る。

その皿を受け取った私の手の中には、白い貝殻の上に薄く切られて並んだ貝柱がきらきらと輝いている。

身の柔らかい貝柱のだけれど、その切り口はぴんと鋭角。

添えられている大葉や紫蘇の実との色のコントラストもとても綺麗だ。

思わずひとつため息をついた後、すこし後ろ髪をひかれる気分になりながら、私はその皿を二人の前に差し出す。

「まずは一皿目。貝柱の刺身ね。味が濃いから醤油はほんのちよつとでいいと思う」

「わあ、とっても大きいし、すごくきれい！」

「どこか緊張感すら感じさせられるな。切り方、盛り方でも変わるものなのか……」

二人がその皿を目を見開いて見下ろす。そして恐る恐るといった手つきで箸をのぼす。でも、それも一瞬のことだ。

「あま〜い！ 美味しい！」

「すごいな。ホタテがこんなに甘いとは思わなかった」

先ほどまでとは違い、口数少なく箸を動かすヒナタさんと小豆子にほくそえみながら、私は厨房に戻る。

その厨房からあがってくるのは、これまた暴力的なバターと醤油の香りだ。ガス台の前に立つ崎本さんの手元を覗き見れば、そこには網の上に殻ごと乗せられたホタテがぐつぐつと音を立てている。

「うわあ、良い香り。それに貝の汁もしっかり出て、とっても美味しそう」

「そうだな……」

その焼き上がったホタテを皿に移そうとしていた崎本さんの手が一瞬止まる。

「若い女性客相手なら、この前ユカリちゃんがまかないで作ってたあれも出すか？」

「えっ？ でもあんな適当な料理、店のお客さんに出していいんですか？」

「良いだろ。あれは美味かった」

崎本さんはそう言っただけで、殻の上でこぼれそうになっているホタテの汁を丁寧に小さなフライパンに移す。

そして焼き上がったホタテを皿に盛ると、自ら厨房を出てカウンターのヒナタさんと小豆子に配膳する。

「うわ、良い香り！ これも美味しそう！」

「まさにへ粗にして野だが卑ではない」というやつではないか。圧倒されるな……」

カウンターの方からは、ヒナタさんと小豆子のはしゃぐ声が聞こえる。

しかし厨房に残された私の前にはフライパンがひとつ。これはどうということなのかと振り返るも、そこには厨房の入口で無言で仁王立ちする崎本さんが、小さく頷く姿があるのみだ。

フライパンに目線を戻す。もしかしなくても、これって私が作れっことなのだろうか？

いや、無理だろう。私が作った料理を出すとかダメだろう。

私は再び振り返り、力をこめて首を左右に振る。

しかしそこに崎本さんの姿は既になかった。慌てて店内を見回せば、崎本さんはいつの間にかにご隠居と女将が座る窓の前だ。

「ん？ 次はユカリが何か作ってくれるのか？」

「へえ、ユカリちゃんが料理するのなんて初めて見るかも！ これって他の常連さんたちに自慢できちゃうかも！」

そんなタイミングで話しかけてくるのは、カウンターから身を乗り出して覗き込んできた小豆子とヒナタさんだ。

小豆子はえせホストじみたうさくさい笑顔なだけだが、ヒナタさんの方はなぜか期待で目を輝かせている。

「い、いや、そういうわけでは……」

「えー、違うの？」  
そのヒナタさんの目に一転して涙が浮かぶ。

「……はい、そうです……」  
ずるい、やつぱりずるい。これがプロのテクニクだとい

のか。そんな顔をされたらもう逆らえないじゃないか。

私はあきらめて、フライパンの前に戻る。

崎本さんが私にまかせるといっただけあって、あれはすごく簡単な料理だ。普通にやれば失敗することもない。筈なのだ。

まずはバター焼きしたホタテの汁が入ったフライパンに、昆布の出汁を少し加える。

次に入れるのは巻物などで使う酢飯だ。火はとろ火で焦がさないようにゆっくりと。

ぐつぐつと煮立ってきたらパルミジャーノ・レッジャーノをけちらずに多めに削り入れる。黒コショウはひとつまみだけ、香りつけ程度だ。

「小豆子、そのバター焼きの皿、こっちに戻して」

「ああ、これでいいのか？」

本当だったら一度出した皿の使いまわしなんていうのはご法度だとは思っただけけど、これは残りもののおまけ料理。見た目もそれらしくなるので許してもらおう。

小豆子から受け取った皿の上の焦げのあるホタテの貝殻の上にフライパンの中身をこんもりと盛りつける。

そのてっぺんにイクラを数粒と、飾りの木の芽を乗せる。そして小さな漆塗りのスプーンを添えれば完成だ。

「おまけの料理だ。ホタテと酢飯のリゾット風なナニカ」

「へえ、おまけてわりにはすごくオシャレじゃない？」

「そうですね。ユカリが作ったとは思えない見た目だ」

そんな事を言いながら、二人はリゾットもどきを口に運ぶ。

「以外だな。酢飯というからもつと酸味が強いかと思ったが、そんなことはないな。ちゃんとリゾットだ」

「さっきのお酒ともすごく合うかも。ユカちゃんお酒、同じのもう一度ちょうだい？」

「私も頂こう」

「あー、はいはい」

随分と機嫌のよさそうな酔っ払いたちに新しいお酒を注ぎ直したあと、私の肩の力がやっとなげける。

やったことは以前にまかないで作った料理を出しただけ。

しかしお客様に食べてもらうものを作るといふことはこんなにも緊張することなのか。

どうやら今回は失敗はせずに済んだらしいけれど、こんなにも金輪際勘弁してもらいたい。

「ユカちゃん、おつかれさま。少し奥で休んでいいわよ」

半ば放心していた私に声をかけてくれたのは、ずっと窓際の席に座ってご隠居の相手をしていた女将さんだ。ふと時計を見れば、いつの間にかにご隠居が帰路につく時間になっている。

「はい。じゃあちよつとだけ……」

その言葉に甘えて、私は店の奥にある畳の小部屋にばたりと倒れ込む。

疲れた。今日はお客がこんなにも少ないのに、何故にこうも消耗しなくてはならないのか。

小豆子め、次にゲーム内で会った時には必ず復讐してやる。

そんなことを考えながら、私の意識はふっと遠のいて――  
「でさあ、あずにゃん。さっきの戦友ってどういう意味なの？  
ユカちゃんどあずにゃんってどういう関係？」

「ああ、ユカリとは同じチームにいますね。あいつはその  
チームの副長で、私はまあその部下って感じですかね」

「ええ？ チーム？ 副長？ それってだいふ以外かも！ ユ  
カちゃんって大人しそうに見えるのに、そんな過去があったな  
んて……」

「あらあら、まあまあ」

「いやいや、ユカリはあれで結構短気ですからね。いちどス  
イッチが入ると一直線というか。そういえば〈突貫〉なんて二  
つ名もつけてましたね」

「へえ、私も高校の先輩にはそういう人いたけどさあ、まさか  
ユカちゃんがねえ……」

「あらあら、まあまあ」

「ちつがーう！ 小豆子！ 変なことみんなに吹き込むな！  
違うから、絶対なんか誤解してるから！」

ここは、大衆割烹「梟の罫（ふくろうのねぐら）」。

暖かくて美味しくて、時々恐ろしい客のやって来る、私のア  
ルバイト先なのである。

## あとがき

◆なはじめまして。セルゲシア・ガゼットのヤマト風土記、メインライターで今回もつと小物のさわめと申します。日ごろは鉄球を振り回すのが仕事です。このような形の作品を書いて同人誌に収録するのは初めてなので緊張というよりかは実感がありません。濡羽つちのダメダメな妄想をお楽しみいただければ幸いです。なおシロエはこんなこと言わない!と思っても濡羽NONNAIなので仕様です。(さわめ)

◆原作者と外伝作家とヤマト風土記メインライターに並んで、自分の話が本に載ることになるとは……。まさに秘密結社七面体工房のカオスぶりがよくわかるラインナップ! 参加させていただけに光栄です。作品ではTRPGで設定作成を担当した〈アキバミュージックフェス〉とミサお姉さんで遊びました。ミサお姉さんダメ可愛いですよ! 無論、クール知的三佐さんも好きです!(津軽あまに)

◆「でっちあげる」という言葉の語感が好きなのですが、この「でっち」とは何なのでしょう? 「でっち棒」といえばおちんちんのことなので、きっちエロい意味の言葉に違いはない(迫真)と言うように思ってる橙乃です。伊58も多分エロい

娘にちがいないね。でち公だしね。秀吉のことも墨俣城をでっちあげたと思うと親近感わきます。ベニヤ板で作った城とか動けばいいやつてレベルのコードとかなんか壮大だけど中身の無い企画書とか、ブラック労働の徒花(エロい意味)なのですよ。そんな感じのノリで書きましたけど、ウイリアム愛は百二十五%です。かわいいよねデインクロン。本編も第三部なのでこのままぐわつとおわらせたいものです(橙乃ままれ)

◆このところめつきり寒くなつてまいりました。要するに締め切りぎりぎりつてことですね。唐突ですが皆様お酒はなにがお好みでしょうか。私は最近専ら日本酒です。こう寒いと湯豆腐と一緒に熱燗をきゅつとしたくなります。ああ、でもお湯割りで焼酎とかもいいなあ。そんな「あーもう酒飲みてえなあ」という気持ちだけでうりゃつと書いた話がこんなになってしまいました。良いのかなあ?(やまね)

◆奥付:

「まかないよにんまえ 七面体工房ログ・ホライズン短編集」

制作・七面体工房

印刷 HICO (プリンティング工房) <http://www.jp.co.net.co.nf>

2016/12/15 発行

